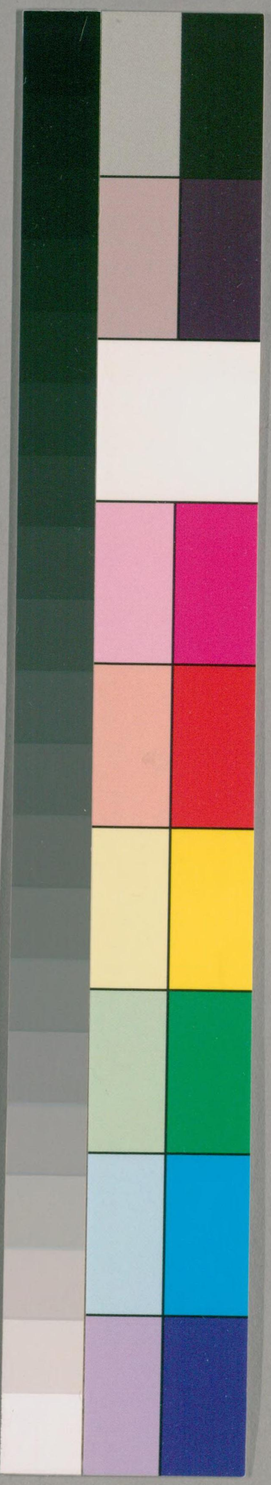
桃洞遺筆 第二輯 卷

W391
N2



国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用

桃洞遺筆

第二集

上

W391
N2

東京教育博物館
類 博物
屬 雜記
冊 参
函 廿五

國立國會圖書館
6.9.21

国立国会図書館　　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6,附録』　請求記号 W391-N2

ガラス使用

東京教育博物館

明治十五年九月廿日購求

桃洞遺筆巻之四目録

第二帙上

一 櫻蘭
一 春芙蓉
一 吹上白菊
一 白鮮 附小葉者
一 波那志乃支
一 元寶草
一 蜘蛛血石
一 磁石毛
一 阿通斯
一 天狗魚
一 一年栗 附二度栗 三度栗
一 拂ゝ橋
一 義松
一 金雲母
一 石枇杷
一 眼茄
一 蠻

紀伊 渕原八三郎 源良直藏書之記

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』　請求記号 W391-N2

ガラス使用

白鴉　日月草
燕　附 白脰烏
白蟶
海鱒
蘆鰻
木晶
小浦異魚
宇久比須乃木　附 宇須乃木

桃洞遺筆巻之四

紀伊　小原八三郎源良直　録

吹上白菊

八雲御抄巻に九菊萬葉不詠歟寛平菊合以後殊名物とハなりてホリグサと云ふといへり今に至りても猶菊を翫ふこと益甚し中にも本州吹上の白菊ハ古歌にも多く詠して世人これを賞翫し花壇に吹上白

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4〜6,附録』　請求記号 W391-N2
ガラス使用

菊と呼ふもの二種あり一ハ洋菊の中花色白きもの
なり一ハ俗に小紋菊一名ハてカゼ草と呼ふ者なり高
さ数尺葉互生し形山椒菊葉に似て長く半より上ハ
粗き鋸歯あり九月の末茎の梢に単瓣白花聚り開く
大さ寸餘形深家に用ふる菊小紋の形に似たり故に名
く漢名未た考へす按するに此二種吹上の白菊にあらされは古
老の傳に寶永年間に冷泉家より吹上の白菊を求め
らる　有徳大君　命して只海畔及原野に多く生
る龍脳菊をもて進せらる冷泉家の説に菅家の詠を

もて考ふるに必これそ吹上の真種なるへしと甚感嘆
せられしといへり此菊今も海部名草両郡近海の山野
に多く生し季秋花を開き単葉小花にして其瓣白色其
心黄色なり清香殆と龍脳に類し又葉を揉て嗅に龍
脳の香あり故に龍脳菊といふこれ和漢通名にして

群芳譜花譜三菊條白色の部に龍脳一名ハ小銀臺出京師開以
九月末類金萬鈴而葉尖花色類人間紫爵金而外葉純白香気
芬烈甚似龍脳是香与色俱可貴也といふものあり
按するに龍脳菊ハ宋の范成大か菊譜に出つ其文
ハ菊譜の畧文なり花色類人間紫爵金の八字も花上葉色
類人間梁爵金の十字に作れり花心の黄色なるといふ形り

直接は古歌に詠める吹上ノ白菊は異なる種にてハあら
く常品の白菊といふなり其證左のごとし

古今和歌集 巻第五 秋歌下

寛平の御時きさいの宮の菊合にすはまをつく
りて菊の花うゑたりけるにくはへたり
けるうた吹上の濱のかたに菊うゑたりけ
るによめる

菅原朝臣

秋風の吹上にたてる白菊ハ花かあらぬか浪のよするか

直云 群書類従巻二百廿六 和歌部八十一
に寛平菊合一巻を収む左右各十番の歌

なり左方右方乃菊は殿上童に立君と女
すはまにて花をなむもてとりさせてを
ひをとり以ま九本をはまちたをつくりて
てそこなるその所々のをまは思ひや
るへし面白き所の名をつけつゝ菊に
ゆひつけたり右方ちまも殿上童ちこ為
菊重時あそのさわろたけりむすてりみ
てきくともなはすへきをたはひとお
わきにはくりてひとつなうたされハ書
ていつまれをころせられハ云ことなり
その左方八番ま此菅公の哥出て題ハ紀
伊國吹上濱菊となり

夫木和歌抄 第十四

九十九首菊の哥の中に　従三位為実

ふかくひく菊のえたなりけり白きまへにいまた吹上の濱の秋風

素性法師家集
題しらす
吹風の吹上乃はまの白菊ハ浪のよするか花さけるか
按するに此哥菅公の歌に異なることなし いかなる事にや

宋雅家集千首
草
濱風の吹上にさけるしら菊ハそれかや菊の香に深きも

拾玉集
菊花臨水 後柏原院御製
時しもあれ波の花かや秋風の吹上の濱にうつろふ白菊

名所菊 同
星とみる花もさかりに吹上の濱にゆふしら菊
白菊乃花ゆへちるおきのそや花にそ移りて吹上の濱

雪玉集
秋二十首中海邊菊 逍遥院内太臣
移ろはぬ世の霜をもまつし秋風の吹上にさき残るしらきく

艸根集三
濱菊 正徹
吹上の濱のまさこもしら菊のうつろひにけり浪をまちへる

天狗魚　直云伊勢にて天狗魚と呼ふ者ハ鯱魚
に似たる海魚にして別なり別に録ス
一名天狗ホメ　天狗ブカ　熊野　以上　漢名未考此魚南海
に産ス大なる者ハ長さ三尋許周圍五六尺頭ハ海豚
の如く上唇鼻長く出る目至て細長し惣身淡黒色に
して深黒の斑点あり皮膚に至て細小の沙あり脊に
立鰭あり又腹にもあり尾ハ両岐にして上の方長く
下の方短し熊野にて往年此魚を捕る事を禁ス若こ
れを捕へハ海神祟とおそれいふて甚恐るゝ安永年中
紀伊牟婁郡
勝浦村饑饉にて止事をえス土人此魚を捕へ食ふ其

味佳からス毒なし
直云此魚今にてハ熊野浦にて捕ふ性至て魯鈍
にして人を恐れス漁人初め鯮を刺入るにさせと
知らス漸くに其痛を知り海底に沈む其時鯮の縄を
木に強くあれる痛に堪かね海底にて顛倒して後にハ
其縄を身に纏ひ死して終に海上に浮をいける此
を採て油をとる事鯨に同し又其肉を糕となし伊
勢の山中へ售る大小賤民の用に利あり又此頭骨
をよくさらして天狗頭の髑髏なりといひて寺院

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6,附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用

冊上ノ第三

の什物とし児女子が輩を欺く者是なり又海豚（イルカ）の
頭骨ふてとも欺く平賀源内の風来六部集巻下ふ天狗
髑髏圖と出せるハ海豚の頭骨を画けるなり

櫻蘭

今花估ハ多く栽ゆ蔓巨く竹ふ添ふべし葉糙ふして
厚く茎ふ互生し花淡紅色ふして一処ふ聚り毬をな
し開く白色なり蘭山先生の説ふ廣東新語巻二十七草語ふ
有毬蘭開至五十餘朶團圓如毬といふ者是なりといへり按ずる
小蘭書南産志巻上花属ふ小哀繡毬ハ藤生花一簇

冊上ノ第六

粒十葉其団如毬初開微帯粉紅色開尽則白といへる
も亦櫻蘭なるべし
直云一説ふ小哀繡毬を八仙花が類とし藤生とせしハ誤れり

一年栗　附二度栗　三度栗

南海諸州稀ふ産し子生ふして其年花実あり高さ二
尺許形状常品と同し按ずる唐の劉恂が嶺表録異（唐代叢書第三集収之）ふ廣州無栗惟勤州山中有石栗一年方熟皮厚
而肉少味似胡桃仁熟時或為群鸚鵡啄食略尽只此石

此所引勤作靳
字下有四如斯字
字無肉少二字

然野栗栖荘芝村本荘西栗栖内村三里一本杉村等の山中にあり

栗亦甚稀少といふ者恐らくハ是なり
直云晋の嵆含カ南方草木状下巻に石栗ハ栗同但生ニ
於山石罅間花開三年方結実といふ者亦同類なる
へし又宋の范成大カ桂海虞衡志の石栗ハ別物
なり○直又云本條の一種ニ二度栗三度栗あり二
度栗ハ并河永カ大和志巻十六山邊郡土産小栗福住
村ニ出一歳再結実呼曰二度栗とあり三度栗ハ越後
信濃上野下野因幡石見紀伊ニ豫土佐筑前等ニ産も一
名樋原クリ石見山グリ筑前といふ一年ニ三度実を結
ぶものなり

春芙蓉

木芙蓉ハ秋花を開くをもて花暦百詠巻下ニ一名秋華といふ然るに文化四年丁卯の春三月下浣予カ門生内藤
柳蔵の園中ニ栽たる木芙蓉高さ五尺許なるその花を
開くこと皆五朶毎秋開く者より形小なり而して其秋
も亦花あり都て櫻桃杏梨の類ハ狂花ある事ハ毎ニ
ある處なれとも芙蓉ニ狂花あることハ頗る奇なり
直按ニ唐山ニても此事あり清の毛文埜が纂脩浦江

縣志 卷之六 褥事志 ニ 春芙蓉萬曆十九年春未夏初通化鄉
芙蓉開者五六処而峯溪巖為尤盛ト云ヘリ

拂ニ嬌

今衣服ニ織ルカスリヲ拂フ嬌ノ字ヲ用ふベシ 清黒
錄 卷三 衣服部 ニ云同光年上因暇日晩霽登興平岡見霞彩可人命深院作霞様紗作十褶裙令賜宮嬪是後民間尚之競為彩裙號拂ニ嬌

白鮮 附 小菓者 波那志乃夫

白鮮ハ明一統志 卷十八 濟州府土産ニ白蘚ト作ル本ト和産ナシ

藥ニハ根皮ヲ用ふ白鮮皮トいふ舶来ノリ古渡ハ心ヲ去ラ全根ナリ形長大ニシテ色白シ新渡ハ量目ヲ重クセん為ニ皮ノミヲシテ色白シ心ヲ去ル事中始メ来ル今花姑ト稀ニ用ふベシ一具苗ハ文化年中始メ来ル今花姑ト稀ニ小ノリ春宿根ヨリ苗ヲ生シテ高サ二三尺葉ノ形ち岡ノ如クニシテ寛政年白鮮皮擂中苗葉ヲ連ル者ト一般ナリ三四月ノ間ニ花ヲ開ク形又図ノ如シ五瓣粉紅色ニシテ莢ヲ結ふ五稜ノリ形八角茴香ニ似テ大ナリ中ニ黒子ノリテ椒目

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』　請求記号 W391-N2
ガラス使用

の如し其根白色大さ大拇指の如く其臭呉茱萸又蜀椒の臭にもかよへり別に一種の臭ありて実に羊臭ともいふべし 故に白鮮白羶の名あり 鮮羶並に羊臭なり 又葉にも其気と等しくあり これ本草綱目 巻十三 山草類下 頌の説に白鮮苗高サ尺餘茎青葉稍白ク如シ槐亦似ニ茱萸ニ四月開ク花淡紫色似ニ小蜀葵花ニ根似ニ小蔓菁ニ皮黄白ニシテ而心実スト いふ是なり即真物にして今呼て大葉白鮮といふ又小葉白鮮と呼ものは今花姑にて唐種白鮮と以て本琉球より清種と取よせ 本邦へ渡せし者なり これは白鮮の

偽物にして救荒本草 巻十一 木部 に載たる欛齒花一名錦雞児花なり 初集第二巻に詳なれ 今薬店にて真の白鮮と呼び售る者皆此根なり用ふべからず 直按するに 近年舶来の白鮮皮なるも此根なり 又市人木槿皮根及木芙蓉根皮をもて白鮮皮に偽り鬻くものあり 宜く詳に辨別すへし ◎古説に花シノブ一名草シノブ或は春藿香といへる草をもて白鮮とれ非なり 此草春宿根より苗を生れ高さ二三尺 葉ハ土用藤の葉に似て枚多く着く 四五月茎端に五寸許の穂をなれ花の形桔梗に似て五瓣大さ三四分紫碧色 又白花となり 実ハ房をなし

一南天子ともいひ熟して褐色なり其根ハ甚細く白
鮮のごき根なれバ漢名未考へ直云又大菓の
大なるをも根ハ細し
直云輔仁の本草和名第八巻順の和名鈔巻二十並
草中草類
ニ白鮮を比都之久佐と訓せ其須を何の草ともて
充しや詳ならず恐ハ梁の陶弘景ら名医別
録大観本草ニ気息正似羊躑躅といへるより名らけ
巻
しならむ道春の多識篇巻ニも白鮮をヒツジグ
サの古訓なるをもて睡蓮なりといへるハ誤の甚

一き者なり睡蓮をニツポンクサといふハ未の時花
を開くをもて名くるなり水草ゆゑて同名異物別
條ゆ詳ら又延喜式巻三十七典薬寮ニ上總六介下總五介
ニ白鮮を貢ぜる事を載ル普通本訓なし齊恒君
の延喜式考異巻六ニ負高本上総の條加多之菅の訓
ある事をいへり是亦何物の考ふへからず本草和名ニハ
三白草を加多之呂久佐と訓せり又花鏡ニハ救荒本草
菅をもて白鮮とし曽呂山ともり駒ツナギの
事ゆて穏當なり又先年武蔵の
東都郊外ニ白鮮ゆ充ら

白鮮圖

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用

…居士随園詩話補遺巻一三
兄弟怡々者多不概見休 戴安衡孝廉咏黄山連理
柳千峯前連理松柯交葉互 …為援同気难分別従使
不化龍殊有奇記

へさきの出る事あり只羊臭なきを異とすといふ又
大和吉野山中より木槿に似て秋単瓣の白花を開
くものを白鮮と名づけて出る事ありといふ此二品
ハ予未だ見ざれば記さんとするも真物にハあらざ
るべし

義松

又広山名花木の連理などいふ事の諸書に見ゆる事は麟書巻十一下の霊徽志下
及王応麟の玉海巻百九十七の祥瑞篇に詳なり

明の陳耀文の天中記巻五十山川紀異を引て曰翔鸞観在南昌府城西南有二松相去五尺合為一幹号曰義松

本邦諸州にも産る俗に相生の松といふ

直按に明一統志巻四十九にも義松を載る天中記と同文なり

元寶草

佛の座ハ人日七種菜の一にして公事根源巻上拾芥抄巻下河海抄巻十三 壒囊鈔巻一 本朝編年録巻十一等に出より
十名仏ノツヾレ 用薬須知後編正誤附録 此草原野に多し臘月よ
り苗生る茎の高さ一尺餘の葉の形積雪草葉の如く
脚葉にハ茎あり節に附る葉にハ茎なく其節を不旋
り附る形恰も蓮座の如し故に名く尤数層を起せり
正月の末より葉上毎に小紫花聚り開く愛るべし気
味微に辛苦涼にして毒なし野人採て蔬となし食ふ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6,附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

師説に本草従新（巻一下 湿草類）に載る元宝草に充る其文に云辛寒補陰治吐血衂血生江浙田塍間一茎直上葉對節生如元寶向上或三四層或五六層（直按に元寶ハ唐山にて今通用の銀なり寶暦年間に清商齎し来りといへる者にとる小形紙門の鑼鈕の如く其重さ五十銭或ハ百銭なり）仏の座の葉の形此通用銀に似より故に名づくるなり○古より佛の座に諸説あり一説に車前草（オホバコ）或ハ芋魁（サトイモ）或ハ紫雲英（レンゲバナ）或ハ蓮藕（ハスノネ）の事とし皆誤りなり又和爾雅（巻七）に臭蒿（一名黄花蒿）の字をもて仏の座と訓し巻懐食鏡（菜類）には鶏腸草（タビラコ）と一物とあれし松岡玄達ハ救荒本草（巻四）の風輪菜に充て或説には本草綱目（巻廿七）の生瓜菜に充つ此も亦誤なり（風輪菜ハ和名車バナ 生瓜菜ハ和産未詳）

直按するに七種の若菜に数説あり渠本増補題林集（巻一 春部）一説の日本書紀通證（巻十二）並に七種一説の歌とて引る芹（セリ）薺（ナヅナ）御形（オギヤウ）蘩蔞（ハコベラ）耳奈草（ミヽナグサ）鈴菜（スヾナ）鈴白（スヾシロ）是ぞ七種とありて仏ノ座と巻耳に可へありとも正月七日神道家の供具に仏の字あるをもて忌るなるべしとす 春七種考二巻を著して詳に載たれバ茲に悉くいはず

金雲母

唐山より金礞石と名け来る又青礞石を煆も銀星変して金星となるに諸を混ぜべからず全く金色にして質甚だ軽く厚紙の如し折ときは数薄片となる一片々採て火に煆ば幾枚も重畳となり形大になる和産飛騨よりといふ

又銀色なる者あり銀雲母といふ金銀二品通してヒル石になるといふハブ石といふ按に正字通亥集下に火齊は珠の名一に曰似雲母重畳而開色黄赤如金出日南といふ

恐らくは金雲母なるへし

又格致鏡原巻三十二小粋史類編を引て千舊見有婦人耳環色紫而光豔照映若紫玻璃具質甚薄不識是何物也或称為紫辣子蓋火斉也といへるは同名異品なり

直按するに明の張自烈の増補字彙巳冊第拾齊字注同文なり梁書巻五十四列伝第四十八中天竺国の下に云火齊状如雲母色如紫金有光耀別之則薄如蝉翼積之則如紗縠之重沓也して南史夷貊伝上同文にて薄如の二字なし △

握雪礜石 即蜘蛛ノ血石

本草綱目巻十に時珍曰謹按独孤滔丹房鑑源云握雪礜石出曲灘澤深寒時有髓生于石上可采一分結汞十両

又按南宮従岣嶁新書云石液即丹礜之脂液也此石出襄陽曲灘決中或在山或在水色白而粗糯至冬月有脂

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』　請求記号 W391-N2
ガラス使用

液出其上旦則見日而伏當于日未出時以銅刀剖置磬
内吹嘘通赤取出椿汁為丸其液治處便如鐵色以液一
銖制水銀四両磬中火之立乾但此液亦不多得乃神理
所惜采時須用白難清酒祭之乾石華山嵩山皆出而有
腦液者惟此出灘又熊太古集載其説甚詳言丹山磬十両可
乾汞十両此乃入格物之精粲然天地之秘也攷三書所引
則握雪磐石乃石之液非土中石脳也蘇恭所説白垩石
脳相合不當復注于此

詳カナラズ毒ナシト云トキハ磬石ノ類ニアラズ石
蕊ノ類ナルベシ鼠殺トイフ説ハ甚非ナリトゾ
ヘり拙figure本州下那賀郡貴志荘尼寺村の北五町
許ゟ南北一條の小谷ゟり山足ゟ登る事二町許大
小の白石錯雑シ磊ゝ落ゝシテ二百間餘の間小渓
洞を交テ連續せり土人白石谷といふ中ゟ陰陽石
冠石獅子口石等方三丈餘ゟり或ハ二丈余のその最
多キ冬月石液甚上ゥ薫蒸シテ儼ゥ丹青を彩ルがごとし
一俗ゥこれを蜘蛛血石といふ相傳ふ注音貴志正平

といふとの此山にて大蜘蛛を殺し其血忽石を穢し
いはゆる其色変せし血色なりといふは古説なり予先
年より度々此山に遊ひ土人の説を聞に毎に早晨に
谷中に入てみるに石上に赤き膏のごときもの湧出る
又青白の二色も交りられ石液なり白光を見る
即時に乾く赤色は近日のとの鉄色は経日風霜を歴
るものなり此液四時にあれとも冬月殊に多し採て金
瘡(クンチョウ)皸瘃(テアシノヒヽヤケ)風瘡に傳(ツク)ては大小効あり然れとも山神惜之
容易に採れは災ありとて又此石を以て燧火とすれは火災あ

（頭注）故に其液をここ石と引いふかと名を傳へてきつるりとあるべし

り故に其液を採るには神酒を備へて採れは災なしと云
いへり此説時珍諸書を引説と能符合せれは極雪礬
石は白石谷の石液なるへしと疑ふへきられ或説に此
液赤色なるをもて雄黄なりといふは大なる誤なり
直指せるに南紀名勝志二巻紀州舊跡志三巻並に蜘蛛
石は那賀郡貴志荘北山村の西北山ノ半腹ニアリ
大小数十皆白石也相傳フ昔此山ニ大蜘蛛アリテ
往来ノ人ヲ悩ス茲ニ社司貴志垂平ト云モノ此ヲ
退治ス蜘蛛ノ骨石トナル也といひ又一説に坂上

ハ以下物先ノ書ニ
カラス関ニ云ヲト
キカ

田村麻呂の退治をこゝろみしともいへり皆妄説にして往昔正平ゟ山賊を誅せし事あるをかくいひ傳へし事なるべし正平ハ貴志氏系圖を考ふるに左太臣藤原魚名公十四世の孫貴志五郎知宣の曽孫にして貴志太郎正平といふ安貞の比貴志荘の下司職より此荘を治めて利を興し害を除き人民皆其徳澤を蒙る因て土人祠を建て産土神とし權大神社といふ今も此荘中の産土神なり同荘神戸(ロウド)村の西境内周二町餘の中にあり

石枇杷

本州熊野海中稀に産する海枇杷と呼ふものあり高さ二三尺形状海苔樹（ウミマツ）に似て一幹五七枝を分ち其幹ハ海苔樹より扁し最海中にありて柔らかに風日をえて堅くなりて石の如く其色黒くして漆にて塗るか如し枝の梢ごとに灰赤色の葉二三枚づゝあり其葉の長さ二寸許形全く枇杷葉に似り頗る奇品なり按するに桂海虞衡志金石に載る石柏（和名イワヒバ）の属にして華夷珍玩考巻八に石枇杷生海中枝柯文理儼然真枇杷樹也といふ是なり

磁石毛

蘇頌カ本草圖經（證類本草巻四）ニ曰磁石其石上（本綱ニ作中ニ本草原始作黒）色ニ有孔ミ中黒赤色其上有細毛性温功用更勝按字

李時珍本草啓蒙巻六ニ磁石毛ハ自然ニ沙鉄ノ附タル者久シクシテ褐色ノ毛ノ如キヲ云ク也以ヘ[illegible]此説誤也磁石面上微し凹みして周邊に排ぐる処ハ鐵色深く磁鉄を吸ふものなり此処に鉄椎（カナヅチ）にて数十遍軽く打てば紫褐色の細毛即時に生じて磁石毛なり

注 直云廣群芳譜巻十七傳宗の一

緬茄（メナスビ） 即眼茄

羣芳譜蔬譜二（茄附録）に明の許伯衡か滇南雑記を引て云緬茄出緬甸大而色紫蒂圓整蝋色者佳今會城絶不可得多以小者於蒂上刻人物鳥獣之形殊殺風景過滇中者多市之而滇中人亦以此贈遠（田注）遵生八牋巻十八に云緬茄兒用以抹眼眶去火毒又能解百毒形如太栗上有罩帽如畫皮様水磨塗治牙疼效 此品古渡の者薬店にありて能ふて眼眶を磨る眼を明にすれは故に今眼茄といふ形牛奶茄（ヒトクチナスビ）の如く大さ七八分円長方一あらん

皮ハ栗の如く堅くして石の如し一方に蒂あり五瓣になりて圓整にして覆をなしたるか如し故に上有罩帽といふ振れはからからと鳴る割て中に黄肉と種子とあり好事の人壓に㮛子とて草木の別ちなるへのらん

直按するに天野信景の塩尻巻二十一に緬茄（眼茄の事なり）王氏彙苑群芳譜滇南雑記なとにありて予むかし種を二三本生し地にし半夏の生るかほとくなりしか秋の末にみな枯うりしたれは南方の温地ならてハ

長せるにやといへり天野氏は享保中の人なり
此頃は新鮮のものも多く渡れるにや見えたり
又廣群芳譜巻十七蔬譜五緬茄の條に宋の劉子翬の詩をも
載ていはく緬甸実如瓜金粲秋色誰刻紫瓊瑤玲
瓏投遠客

阿適斯

蝦夷にアツあるアツニといふ木あり夷人其皮を績
して布とし衣とするをアツシといひ松前にてはオヒヤウ
といふ直按に和訓栞前編巻二に蝦夷人衣をあつ
しといへりあつの皮にて造れるなればといへ
る神世の風俗なりしなり或はおひやうといふ木の
皮にて織といふ先にある夷名にやといへりし十九
南部にてはヽダノ木といふ詳ならず先年予日光山九蔵峠
にて一株懸崖に倒垂する者をみる其葉互生して形
楡葉のごとく末三尖或は五尖独脚蓮の一葉の如く皮
至て柔靭枝を裂て是を採れは直に根に至る其靭なる
こと知べし漢名未考楡の属なるべし
直按に信濃和田峠に産する方言ウバ子ムといふ
者同物なり一説に此木を明一統志の勾芒木に充
る本書巻八十四に考ふるに梧州府土産に勾芒木皮可績

為布陸川縣ニ出とい へり。又宋祝穆カ方輿勝覽巻三十七新州の土産ヲ勾緣藤南人績以為布と載せて東譜中陸稀藩粤西偶記（鈴前集收之）ヲ勾芝木其床可績為布と記りこな形状をいふされハ的當ならしうるし猶考ふべし

注 赤雅巻上ニ布と織るよしを勾芒布といへり

注 芒と芝と字畫相似たるを以て誤れる

蟚

怡顏齋介品巻上蟹類ニ蟬蟹と載せて江戸ニアリ形蟬ニ似タリ蟬ヲ倒ニシタルカ如シといひて漢名を考へハ昆陽漫録巻一ニ蟹譜ニ云匡長而鋭者謂之蟚ト有り先年

金澤ノ海ニアリトテセミ蟹ト云モノヲ見タリ其形蟹ノ如ニシテ長シ即蟚ナリしといへり按ずるに此蟹南海諸州にも多く産は介品ヲ圖せりうるへし（蟹譜總論の注ヲ蟚音戯とせり）

白鴞

本草啓蒙巻四十五ニ鴞ノ一種シロフクロフハ略シテシロフクトモ云ふ松前蝦夷ノ産ナリ羽色白クシテ黒斑點アリ楊弓ノ矢ニ用フといへり先年攝津東成郡中濱村の樹林中にて獲る者左ニ圖すこのめし

直云白鴞の一種も羽に黒斑なく純白なるものにしてフクとよふ又ハ茶楊弓の矢に用ふ

白質にして黄黒斑あり

と出セイか、
ヲニテモ

日月草

先年門人岩田三谷問て曰和方中小日月草ありと聞く出書も此まゑ志りてを何物なるや予未識らすとし答ふ其後梶原性全の萬安方を閲せる小巻三十九小児小門五小児ノ穴草始ハ口ナクシテ高ク腫ルナリ底ヨリウミテツユルソリニ骨脊ニメ穴アキ島ノ目ノタケタル如クナリ是ヲ治ムル一方日月草久クカレタルヤノウヘノ苔ヲ出セ秘事ナリフキノ根ノ汁ニテ和シテ上ニモツケ内ニモ服セヨと見えたり

蘆鰻

本草啓蒙 巻四十 鰻鱺魚の下に云一種豆州ノ方言蛇ウナギ径三寸許長二尺許時々水ヲ出テ草中ニ居ルト云 又本州熊野の醫堀宇仙の曰古座川の大ハウナギに形常品より巨く大なる者ハ長さ一尺五六寸時々水を出て蘆荻の中に在て雑食すと[illegible]まゝある事を[illegible]按するに嶺南雑記 巻下 に蘆鰻産海邊随潮登岸食葦筍潮退入溪田中不能去可得有重一二十斤者有重五六斤者全似鰻而身短背黑有類烏鱧味極肥美余于恵来縣食之不可常得といへる類なるへし

直按るに伊豆海島風土記 巻下 に島名カハナダハ鰻鱺ノ類ナリ谷水ノ落口海ノ境ニ住ム長二尺餘形泥鰌ニ似タレ圧太キ事周圍五寸許油アリテ味重シ此魚夜陸ヘ上リ蟲ヲ食ス其跡ヲ慕ヒテ捕ルといふも其属なるへし又越後にて方言イハナヒといふも此等の属をいふ乎以[illegible]なれハ是推知[illegible]

燕鷰 有二物 附白脰烏

詩の邶風なる燕々于飛と爾雅釋鳥十七なる燕々は鳦と燕白脰烏
烏との二條あり燕々は鳦とは今の燕なり燕々とは
古人重言之也と邢昺の疏にいへり燕は白脰烏とは漢の
孔鮒が小爾雅廣鳥篇に烏白項而羣飛者謂之燕烏とある白脰
烏也といへる者にして船来ありコクマルガラスといふ
ふ形本鳥より小さく翼長く尾短し項より腹下に
連りて白色喉胸より其餘は黒し即燕子の燕と同名
異物なり又然るに康熙中の人姚彦暉が詩識名解一巻に邶風燕々の下に

單に燕といへば白脰烏に限り今燕子を燕々といふも
もして燕と單称せると誤りとし其文に鳦鳥本名燕
々不名燕以其雙飛往来遂以雙声名之若周之蛩々猩
々之類最古之書凡三見而語適合此詩及釋鳥文
燕々は鳦與漢書童謡燕々尾涎々是也餘書省其文多単
言之後詞章家習用乳燕海燕之類不知単言燕者乃烏
名釋鳥云燕白脰烏小爾雅謂之燕烏鑿空可據則舊以
燕々為両燕及曲為重言之説者皆非也といへりこれ
一説なれども牽強に偏に渉れり

牽強らし

按するに 郝氏の爾雅義疏下に蓋白脰烏の烏字を鳥に作り 即今の白頭翁也といふ 其の説の注ふし 誤也といへる説あり 恐らくは此説ならん 因

直安西河合集経の部に収むる続詩伝鳥名巻一 巻一

燕一名而有両鳥一是今燕子説文作玄鳥玉篇作乙爾雅作鳦埤雅謂是鷾鴯荘子所謂鳥莫智于鷾鴯者雖復有漢燕越燕胡燕之分然故燕也若其一是白脰烏小爾雅所云燕烏者不知爾雅何故竟称作燕而顧野王作玉篇亦因之曰燕乙也又白脰烏也然遍考他書自六経諸子史籍凡有記述並無有称燕作白脰烏者則安有此矣といへり

此下未詳の語之説に若蒙玄之也の説に敢して非一悪而章玄之也の辨あり

木晶

先年京師の森禮蔵舶来の印材一顆を携来り其本性何物なるを問ふ其色淡褐にして其質光沢強く玉のごとく刀を入るに紫檀黒檀の類より堅硬なりといふ予始て見る品にして何物なる事をと答ることを能はず其後池北偶談 談異三 巻二十二 を閲るに門人南陽李鴻嘗贈予印章色類楠櫃質如玉上作亀鈕甚精云是木晶海外産也といへる者是なるべし

白蟶

続修臺湾府志 巻十八 物産二 白蟶条云臺原無蟶康熙五十九

年始有生于海泊泥塗中形與内地蜆無異但殻差薄色
白如玉肉尤清甘四五月時有之　按ずるに此との本邦西
南海に産を五百介圓に雪ノ朝夕介といふ形蜆より微
に纖く殻薄く潔白銀光ありて至て麗し蜆の殻波濤
にさらされて白色になれる者とハ別なり

直云近年本州海部郡荒濱の海中より一種の白蜆
採り出す形状本條より長く幅狭し其色潔白にて銀光
あるハ本條と同し玩介家に名けて白及介といふ
及介とハ別なり

小浦異魚

享和二壬戌の春蘭山先生　台命を蒙りて本州熊
野に採薬に徂徠之日高郡三尾莊小浦にて小異魚を得
より土人も其名をしらす大さ五寸許頭も方頭魚の
如く高く起り目大にして身薄く尾に至りて漸々細
くなり其尾ハ巨綵の如く只一條に[illegible]赤色長さ三
寸許全身淡紫色に小黒点あり又頭より尾に至り腹
の中通りに一黒條あり腹微に白し脊鰭長くして柔
かに赤色艶るもめし又胸の下に巨毛一條ありこれ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6,附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

も赤色ありて長さ四寸許總體麁しき魚なり時ゝ釣
れかゝる事ありといふ他州ゟも産して方言ありへ
し

海鱒（ウミマス）

本州海部郡雑賀崎浦田浦等の海中ゟ稀ゟ網羅ゟ
て得るものゝ大抵長さ一尺四五寸形狀川ますと
同しくして背の青色川ますより薄く白色を帶び脊
鰭小黒点あり肉も赤色なれとも色薄く味大ゟ劣
り漢名未だ考へず

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

直按するにきく川マスといへるハ海マスに對し
いへる称名にして即真の鱒をさしたり　湖魚考 巻上
鱒の下に川マスあり奥山谷川にあり湖のまゝよ
り肥大ならして短く腊多し五六月頃あり多くハな
しといへるハ同類別種なるべし
」

鸎一作鶯

宇久比須乃木　附 宇須乃木

和名鈔 巻十七 菓類 小鸎実 [淫洪抄云 注] 俗ニ云阿宇之智 一ニ云宇久比須乃
岐乃美 [今補] といへる者[物]ハ今もウグヒスノ木と呼[ひ]て諸州
深山中に産れりとウグヒスカヅラ一名シヤグミ 日光

清瀧村 小木にして高さ四五尺枝多く繁り十二月末よ
り諸木に先だち芽を生じ枝葉ともに両々相對し葉
の形楕扁にして薄く膚美なり又躑躅葉或ハ忍冬葉
に似たる者[よ] 或ハ大葉小葉の品あり 直云小葉の者[物]ハ和泉日根郡孝子村の
観音山にあり土人サトツゲといふ 正月葉間に花の茎又両対し出て
細く絲のめく下垂し其先に五出細瓣の紅小花を開
く 直云日光赤沼ケ原にハ黄花のとのあり 花謝して実を結ぶ二月の末
紅熟して形朱桃(ユスラウメ)実よりも小なりアヅキリシといふ小
児好て食ふ味甘く毒なし紫鶺鴒(ウグヒス)の好て鳴き嚼に此

花開くをもて名づけしなるべし先師の説に救荒本
草巻十に載る驢駄布袋これなりといふ◎大和本草に
ウグヒスノ木を救荒本草巻十の吉利子樹に充て又京に
て呼ぶ臼ノ木と混して一物とせるは誤なり吉利子樹は
和本草詳（從て甄実ノ木とミフ別條に詳にせり）臼ノ木は一名コヽキ伊賀と称も小木
にして高さ一二尺葉は蒼木葉に似て鋸歯ありて互生
し夏葉間に白花あり大さ三四分後子を結び又大さ
三四分形微に古稜ありて上凹み臼の形に似たれば故
に名付く熟して赤しコヽキグミ伊賀といふ秋に熟り

紅葉はまた大葉の者もあり漢名いまだ考へず
直按するに宇治左大臣頼長公の台記巻四に久安元
年五月三日権大納言宗輔送鸎実云自和泉國所尋
取之其色紅大如碁石其體円其核微小有三食之甚
美其味甘為其色妙其味甚美足賞翫矣（一本無其味甚美四字）
とあるをみれば五月に熟するを大如碁石と今の
ウグヒスに合は和漢三才圖會巻八十七には櫻桃の事
とせば此説優まさるに似り和名鈔鸎実の外に巻二十
木類に櫻桃を載せたりとこれは途波佐久良に誤れり

礼記月令仲夏之月羞以含桃鄭氏注ニ含桃今謂之櫻桃也トノミアリテ鸎桃ノ名ナシ

云あるなれハユスラウメといふ事をいへるにユスラウ
メも唐山にても鸎桃（礼月記注）の名ありさハ本邦古ハ宇
久比須乃木乃美といへるも出るへうらに猶後の
考へを俟のミ又和泉志（巻三）和泉郡の土産（鸎実と）書載て台
記を引き其下に識内山中出ス以本郡ヲ為佳ト俗ニ呼ニ宇
須乃美ト葉似山躑躅ニ両々相對シ臘月吐芽ヲ正月開ニ小白
花ヲ二月結子三月紅熟シ四月色黒味甜シ酸ニといふも本
條と但ノ木と混し説き且台記の若とさて云る誤
なり

桃洞遺筆巻之五目録

第二輯中

鮮魚 附 戴帽魚
壁虎魚 附 火辟介 刺辛螺 流螺
佐々乃宇手
鬢邉嬌 附 十姉妹
細馬
秋海棠
獅頭柑
一指石
沙蘆菔
苔桃
磁石
萩蘆竹
枝柴
自然生緑巻
小松寄生
皺鰤

桃洞遺筆巻之五

鱗魚　附戴帽魚

本邦西南海ニ多ク産ス俗ニヤガラトイフ魚ナリ
一名笛吹魚　筑前イトヨリ　肥前ヤハズ　伊勢ダツ　同亀山形状海鰻鱺ノ如ク小ナルハ長サ二三寸大ナルハ長サ三四尺全身赤黒色ニシテ細文アリ又微小ノ鱗アリテ無

紀伊小原八三郎源良直　録

満天星
鱧魚即七星魚
山姥休木
青田石
荷包牡丹

舎水瑪瑙
蛇醫
秦吉了
獲
訛骨木

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』　請求記号 W391-N2
ガラス使用

鱗の如し　直云一種全身青黒色にして尾岐ま長絲なき者あり本州魚戸まて青ヤガラといふ常品より頭至て大ま觜長く體の長さ三尺の者ありこれハ稀なり

觜の長さ一尺許あり肉なく硬し宛も竹吹筒（ヒフキダケ）の如し

直云一種觜目至て大に口小く腮の下に短小の鰭あり短きもあり又尾に近くして両鰭あり上下まハ鰭なし尾ハ小くして岐あり岐中より赤き絲長く出る肉ハ白色にして味佳なりし俗此魚の觜をもて膈噎の病を治をいふ　直按るに和漢三才圖會巻四十九に往て試之不必然といふ今も亦然り　大和本草巻十三ま鯖魚を載せて本艸ヲ見ル二今關東ニヤガラト云魚是乎といへるハ誤なり鯖魚ハ和産詳ならず

歟タコと訓せる古説も亦誤なり　文院本に阿漕浦鈴鹿合戦といへるものにたいらう魚を俗にやがらといふ魚まて禁断の場所へハ必此より集るといへるあるよりて世俗戴帽魚をもてヤガラの事となし此ハも稲若水氏の説にして東涯先生の名物六帖第六帖巻二動物箋下東燭譚巻四等に出る然共も引處の明の鐔績の霏雪録の文に安南國有二一種魚一鋭首無レ鱗有レ骨如二若挿一剖然味似二河豚一名二戴帽魚一トとあるにてハ邦産何物にも考ふべからずや

ガラなと見ゆるし蘭山翁ハ明の遯園居士の魚品續説

郛弓四十二收之 不載る鯿魚一名火箭觜に見る此説優れりと

いへ

直云魚品を閲するに有鯿小頭身橘視之圓如盤而

側甚薄大者曰鮥腹脊多腴有鰶身圓如竹頭尖而喙

長俗所名火箭觜也善啗諸魚而品下とあり 鮥の字正字通

亥集中ニ小鮥ニ作り。古伯切。音格。字誤作鮥といへり。

また鰶の字。諧声品字箋康熙字典等にハ見えす。通

雅巻四十七鰣の下。増補字彙及正字通鮥の下に

有鰶俗所名火箭觜也の文ありて音を載せす後世の

俗字なり 又清の陳鑑ヵ江南魚鮮品擅几叢書初集小

るい巻四十八收之

もと有鯿魚頭甚小身橘視之圓如盤而側甚薄腴在其

腹有火箭魚亦曰鮥脊多腴有鰶魚身圓如竹頭尖而

喙長亦類火箭善啗諸魚而品下とあり鯿魚ハ鰣魚

中の一名にして和名ツシキウシといふ形状本草啓

蒙巻四十に詳なり遯園居士の説にてハ鯿魚の大な

る者を鮥となし又火箭觜と鰶とを一物として二段

に別てり陳氏の説にてハ鯿魚の外に鮥をのせて

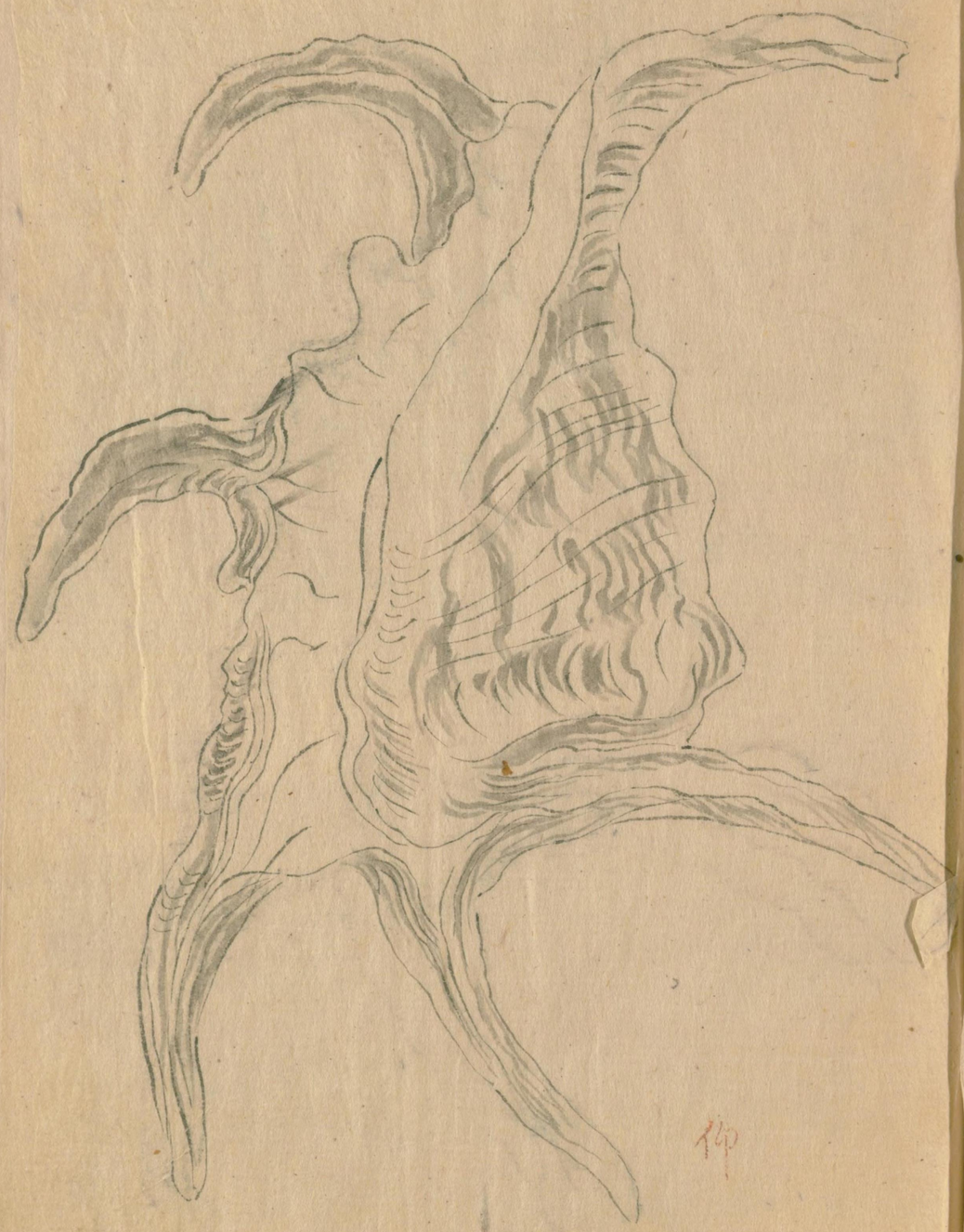
火箭觜と同物となし又外に鰶魚をのせて其説と

ともにヤガラといへり三段に別てり予按るに鮥

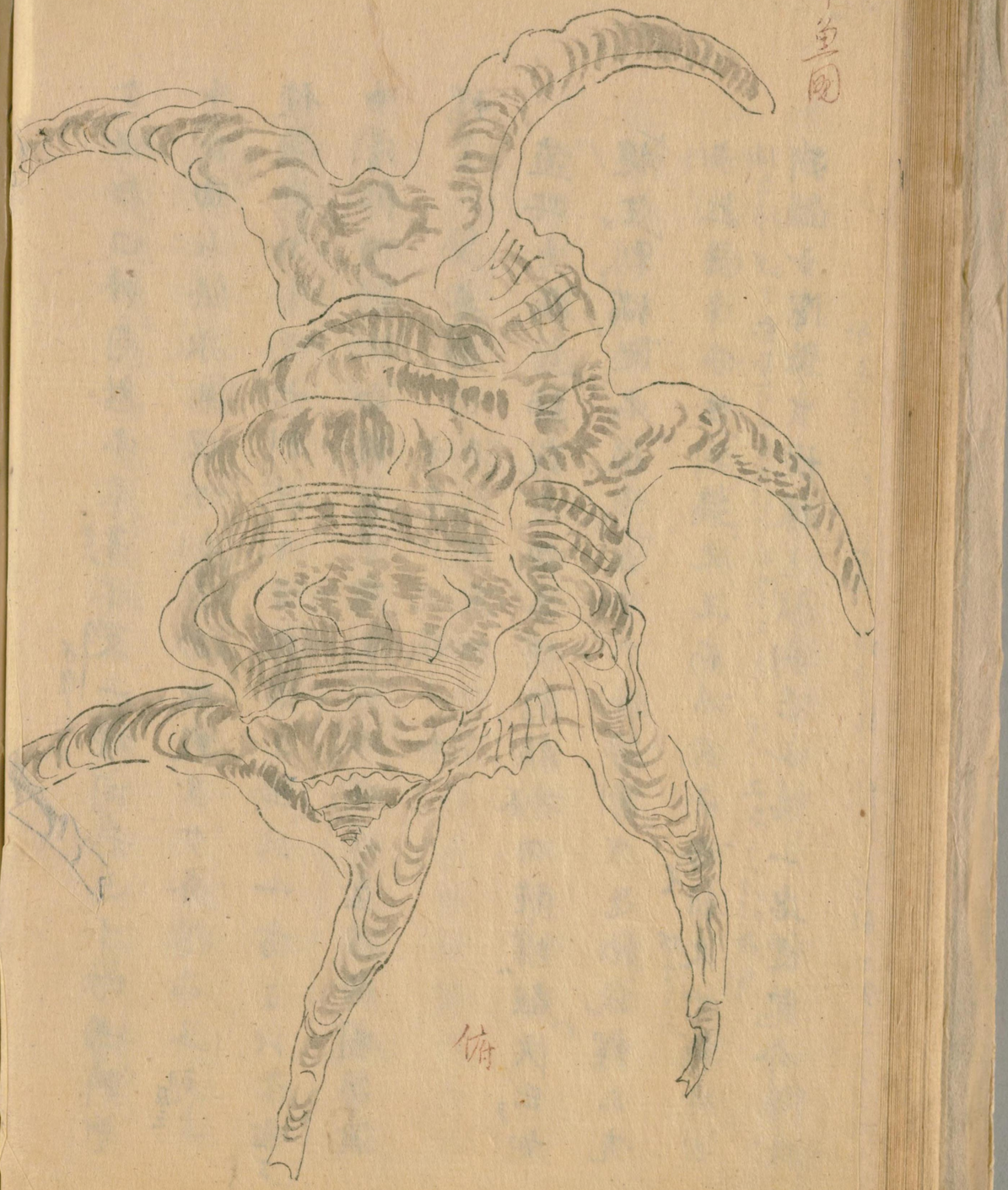
せ鯿と別種なるハ誤なるべし火箭嘴と鮃魚
と二物ニ分れハ是非ニ見るべからざ故ニヤガラニ
鮃の字を用ふるハ害なし火箭嘴の名頗る奇と云
ふとも両説混淆ニ渉るハ尚後人の辯を俟つのミ

壁虎魚（ヤモリカヒ）

中山傳信録巻六物産ニ壁虎魚螺殻上生五六爪形如壁虎
名壁虎魚といふハ俗ニ蜘蛛介と呼ぶとのニして南海
中ニ産れ形状圖の如く大さ尺許左右ニ曲れる長刺六ツあり
て蜘蛛ニ似たり故ニ名く殻厚くして黄色ニ褐色の斑
点あり口の内色赤く麗し又一種同形ニして六刺ある
もに曲られ水の字ニ似たるを水ヨケ介といふ又一
種同形ニして六刺ことも左右ニ出れ一方ニおとゞ出る
も膚淡褐色ニ白褐色の斑文あり五百介圖ニ流
螺といふ是なり
本草の流螺と和漢同名異物なり
直按するに師説ニ中山傳信録巻六の棘螺殻尖出如
棘生刺満之名棘魚といへるを引てとの流螺ニ充
訓紐色とも生刺満之とある文ニ合る又一説ニハ
刺二ミあるて棘螺とも刺二ミある一名悪鬼介とも

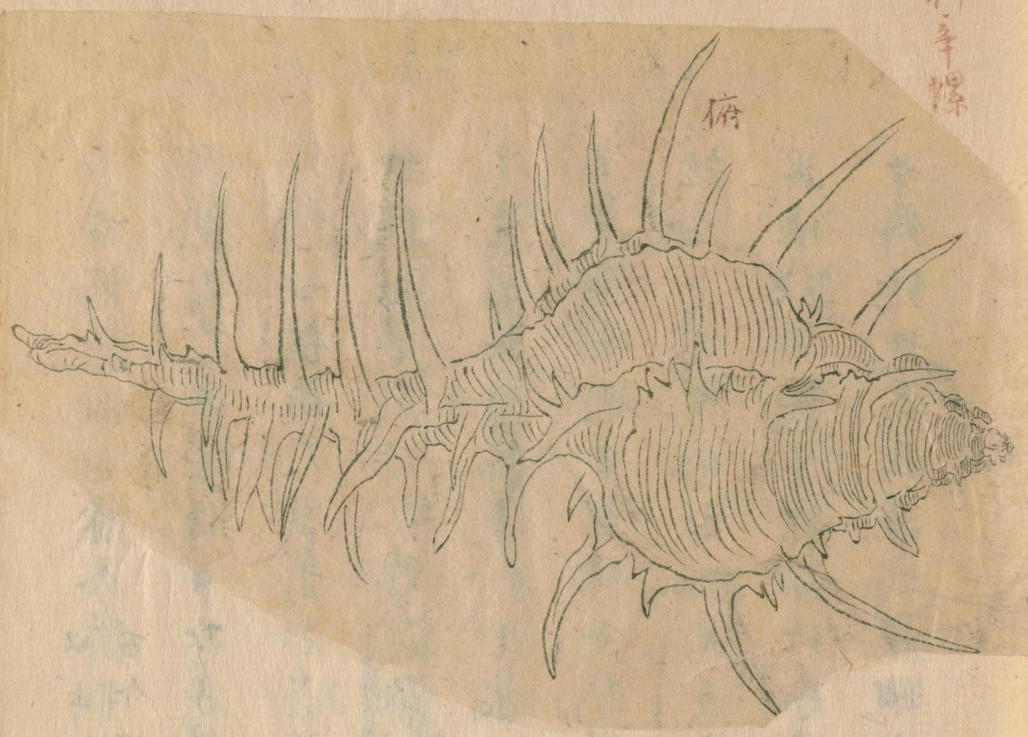

仰

壁虎図


俯

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用

百鬼介とも骨介 以上五 百介図 といふ形圖の如く殻灰白
色なり是亦穏ならされ猶考ふべし

佐々乃宇乎（サヽノウヲ）

下野日光赤沼か原逆流川（サカサカハ）の邊山白竹（チゴザサ）山篠（ノスズ）あまたと多
く産す此竹節より小葉互に相交はりて長さ五七寸變
して淡黄色の魚形となる土人サヽノウヲと呼ふ又
短くして蟲の形をなせるものあり此蟲形のをあまた讀
異録 巻一 木部 に載る蚱蜢竹なるへし 江湖ノ間有ニ一種ノ野竹具ス
葉糾結如ニ蟲ノ状ニ山民ノ曰此蚱蜢竹也といへり

金帯 翁稲菴 百花賦
ハナウツギとらす

直云サヽノ魚ハ飛驒吉城郡高原村の山中よりも産
すと野州産と形状大同小異あり

鬚邊橋 附 十姉妹

天禄識餘 巻上 に成都古今記を引きて錦帯花一名鬚邊橋（載る）
ともいふ 楊升菴文集 巻七 十九 小晷として鬚邊橋といへり 又海仙
花 汝南圃史 巻八 引ニ王弇州詩ニ 文官花 格致鏡原 巻七十 引杜詩註 直云添色 芙蓉また北名あり 金帯 翁稲菴 百花賦 日
月花 清 俗澤の名あり 和名箱根ウツギ 同名 あり 図書巻十二 華夷花木考巻四 またハナウツギとらす 高さ一二
丈枝多く繁る葉楊櫨（タニウツギ）に似て毛茸なく春新葉出て後葉間毎に各一花
あり形風鈴の如く筒子様（ツヽボキ）にして先五に分れ上に向

直按するに益部方物略記に……鬚邊橋あり

ひゝ開く初白色後漸く粉紅色不変し日を經て復深
紅色に変ぶ一枝に紅白交り觀て麗なりし和漢三才圖
會巻八十四にも錦帶花としゲンシに充るハ誤なり
直いそく大和本草巻十二にも十姉妹を出してハコ
ネウツギと訓し錦帶花と其下に載せて一物としハ誤
りなり遵生八牋巻十六汝南圃史巻八八種畫譜木本花詩譜其餘明清の
間花の事を記せし諸書に十姉妹錦帶花を皆別條
に出せり既に秘傳花鏡巻四に錦帶花一名髯邊嬌三
月間開蕾當可愛形如小鈴色內白而外粉紅長枝密
花如鈴錦帶但艶而不香無子亦有深紅者一樹常開
二色有類海棠植於屏籬之間頗堪點綴といひまた
同巻に十姉妹又名七姉妹花似薔薇而小千葉磬口
一蓓十花或七花故有此二名色有紅白紫淡紫四様
といふにて明なり
按に藝花譜に十姉妹花小而一蓓十花故名其色自一蓓中
分紅紫白淡紫四色或云色因開久而変有七朶一蓓
者名七姉妹云とありまた閒情偶寄巻五に姉妹花
花之命名莫善于此一蓓七花者曰七姉妹一蓓十花
者曰十姉妹觀其淺深紅白確有兄長娣幼之分殆楊
家姉妹現身乎予極喜此花二種並植彙其名為
十七姉妹とあり此二書の説花鏡を補ふべし十姉
妹七姉妹を通して姉妹花といふ清の秦嘉謨が千

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6,附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

文集錦巻八虞部に擷芳譜を引て姉妹花一名虞辛花と
いふ今花戸は呼て菩薩イバラといふと知即十姉妹なり薔
薇の類にして花の形状千葉薔薇に似て小さく一
房に七八花或は十花許着て久く堪ず初白色なり
粉紅深紅或は紫白色に変じ一叢に数色交りて
最も美なり

十姉妹鳥

本邦来りて今販鳥家に多し其形[illegible]に似て[illegible]
腹白く嘴[illegible]
中に[illegible]十姉妹は[illegible]
[illegible]

細馬

唐書巻四十八百官志三に載る細馬は上馬の事なり唐六
典巻十七に凡馬有左右監以別其麁良以数紀為名而著
其簿籍細馬之監称左麁馬之監称右といへり延喜
比は遣唐使などの唐山の事を見知て書しにや延喜
式巻四十八左馬寮に五月六日競馬并騎射式右当日早朝
鞁細馬十疋といへり
直云廐牧令に凡廐細馬一疋中馬二疋駑馬三疋義
解巻八に謂細馬者上馬也駑馬者下馬也とあり按ずる

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

支集錦巻八庚部ニ擷芳譜を引て姉妹花一名庚申花と
いふ今花姑ニ呼て菩薩イバラと呼ふもの（即十姉妹なり）薔
薇の類ニして花の形状千葉薔薇ニ似て小さく一
房ニ七八花或ハ十花許着て久不堪て初白色にて
粉紅深紅或ハ紫白色不変して一叢ニ数色交りて
秾艶愛すへし此十姉妹なり先年舶来の鳥ニ十姉妹
といへり今鳥舗ニ多し別係
ニ詳ニせし又江村帰田集巻二ニ巧婦鳥を十姉妹鳥
といへり又諸声品字箋手集鶺鴒字の注ニ鶺鴒俗
呼為十姉妹とりへり又格致鏡原巻八十一及清の
厲静鄭り事物異名録巻三十七並ニ雲間郡志を引
て十姉妹名游香俗ニ呼相思鳥性狎其侶飛鳴不散と
いへり皆同名異物なり混すへからす

細馬

唐書巻四十八百官志三ニ載る細馬ハ上馬の事なり唐六
典巻十七ニ凡馬有左右監以別其麁良以数紀為名而著
其簿籍細馬之監称左麁馬之監称右といへり延喜（本邦にても古ハ細馬の字を用）の
比ハ遣唐使いまた唐山の事をも見知つらんや延喜
式巻四十八左馬寮ニ五月六日競馬并騎射式右当日早朝
鞍細馬十疋といへり
直云厩牧令ニ凡厩細馬一疋中馬二疋駑馬三疋義
鮮巻八 ● 謂細馬者上馬也駑馬者下馬也とあり按るに

ろふ細き細作の細の如し埤雅巻五に云傳に曰狡兎乾ヶ
唐本草良犬ハ即今ノ細狗といふ宋史禮志巻七十四に鷙鳥細
犬といふ醫書類に細墨細酒などの細と同し

秋海棠

秋海棠群芳譜和漢通名なり一名斷腸花名花譜八
月春秋傳花鏡といふ大和本草巻七に寛永年中中華ヨリ初
テ長崎ニ来ルソレヨリ以前ハ本邦ニナシ直按るに筑前續
風土記巻二十八土産考下に秋海棠は昔日本に形し
正保年中唐土より来る故に和名なしといへり二書
並に貝原氏の撰にして初て秋棠の来る年を記せり二十年の遅速あり是非知べからずといふ然れども
本邦東國の深山中には自生の秋海棠あり殊に
下野安蘇郡粟野邊より出流山に多しこれをもて
視れは正しく寛永年間より以前無りしやといふまじ
今此草人家庭際に多く栽て世人の知る處なれは形
状を以てこゝに培植の法は大和本草にあり○又秋海棠
の一種白花の者を白秋海棠といふ清の沈歸愚の國
朝詩別裁集巻二十九に尤在京の詩を載て曰誰将清淚灑
幽墀散作瑤華別有姿最是玉人腸断後淡粧無語背人
時又巻三十朱念裡の詩に曰清秋湛露浥瓊芳素影風揺

扁中ノ廿化

湧幢小品 巻二十七 に云 容梧之蒿可棟高潘之蕨可杖
清の陳子重ヵ滇黔紀遊 雲南條 に云 草麻數十年不凋
其本可作梁棟土人以之構堂屋 清の王漁洋ヵ香
祖筆記 巻十二 に云 予昔奉使廣州親見草麻樹扁草樹
茄樹昨閲一書言西土甘草亦有成大樹者皆異聞也
霏雪録ニ云 安南國甘草大者如柱土人以架屋吾友唐愚士西遊親見之 八丈島志 巻中 に云 番椒
数年不凋後には樹と形るとそ申

獅頭柑

本藩處々に産ある方言唐九年母といふ物あり顆の

玉砌旁夜静肴花人獨立水晶簾外月如霜
直云閩小紀 巻上 に 連江銕騎隠處秋海棠高一丈餘圍
可一二寸許 といふ 總て此品ハ限らぬ暖國にてハ
草の冬不枯して樹となる者多し 今茲に諸書に載せし
る十の一二を挙る左の如し 南方草木状 巻上 に云
文廣草木經冬不衰故蔬圃之中種茄宿根有三五年
者漸長枝幹乃成大樹毎夏秋盛熟則梯樹採之五年
後樹老子稀即伐去之別栽嫩者 東西洋考 巻四 啞齊
物産 に 一統志 を引
て曰大茄樹高丈餘經三四年不萎
子大如西瓜重十餘斤以梯摘之
明の朱國禎ヵ

形大にして遍く圓一尺許高さ二寸にならば外皮麁瘰ありて粗獅頭に類す冬月外尚緑にして内已に紅熟し早春に至り外皮黄色に変じ味香橙に似て更に美なり按するに淵鑑類函巻四百に雲南志を引て雲南北勝州有獅頭柑状如獅頭而色黄有大如椀者其味最甘といへる者恐らくは是物なるへし

一指石

本州熊野新宮の近在に神内(カウノウチ)村四箇荘あり此村の山中渓澗に五尺許の円石あり土人指動石といふ双手にて押

動らせは少しも動くことなく指頭をもて撼せは忽
動く頗奇なり雲根志後編巻二に近江國金勝寺門前に
小六七尺の一指石あると注したる條などいふ東海道名所圖
會巻二小震巖といふ此餘諸州をも探索せは猶多かるべ
し潜確居類書巻廿七区宇廿二に一指石ハ在荊州桐廬長一丈高五
尺綴巖谷間以手抵之輙揺動人力多則不能移元楊維
禎有一指石可動萬夫莫能移之句といへり直按るに明一統
志巻四十一嚴州府の下に一指石を載て在桐廬縣西
北四十里長一丈以下類書の文と全く同じ云々とあるをみれは
荊州ハ嚴州の誤りなり同書巻六十二の
荊州府の下にも考ふるに桐廬の地名なし

直云一指石ハまた揺動石ともなつく清の呉陳琰か
曠園雑志巻下に薊州九華頂有千佛寺寺後半里一石
朱粉色縦二十丈廣十丈有五尺曰揺動石下人悄然推之
輙颭颭動衆推則不動試作語曰我其揺則不動初動
看道光曉説鈴巻中ノ本作者日影移處知之次看石知動也然石根
山連無識嚳焉といひ欽定盤山志巻三名勝一小揺動石
在千相寺北林木叢密中大若夏屋體圓正承以方石
微撼之輙動といへり

沙蘆菔

伊吹大根（大和本草）一名鼠大根（同上）辛味太根　ムクロ大根

出雲又近江伊吹山に自生を今ハ種子を傳へて諸國にうゆる（栽る）六月に種子を蒔き肥糞を用ひずして蔬生の苗葉花実常品と同じく根の貌常品より細く長し又土地によりて貌短く肥大なるもあり皆根の先に鼠尾の如く細き尾出づる生食して味甚辛し故に多く粆麪湯餅の用に供す煮食へハ味甘し明の金幼孜か前北征録に有沙蘆菔根白色大なる者径寸長サ二尺許下支二生ずる者如筋気味辛辣微苦食之亦作蘆菔気と以ふ者是なり

直捗なるに明の踉蹌山人の譯語に載る文同し蓋食之以下の文字卸し又本草綱目巻二十六に北征録を引て沙蘿蔔に作あり

苔桃（コケモモ）

一名ハマナシ又名オヤマリンゴ（出羽）（冨士山）東北國に産を殊に日光男體山其餘諸嶽に多し苗叢生して高さ四五寸葉黄楊に似たり梢に五六花を開く白色にして形アセボの花に似て小さし後に円実を結ぶ熟し

て紅紫色なり冨士山中にて此子を鹽蔵して酒の下物に用ふ閩書 巻百五十 南産志上 に越橘あり樹如黄楊花如瑞香而白実如朱櫻といへり蘭山翁の説に[illegible]即コケモヽなりといふ

直云宮地氏か常毛採薬録 巻下 に信州八ヶ嶽ニアカダマノ木シロダマノ木ト称スルアリ當テ其品ヲ見ルアカダマハ即コケモヽ也シロダマハアカダマヨリ葉色浅ク大ニシテ鋸歯アリ互生ス梌葉ニ彷彿タリ実ノ末数瓣ニ分レ色白しといへり

磁字器

本草綱目 巻七 土部 に出白磁器と 白様ノ茶碗といふなり正字通 午集 上 に瓷音慈類篇ニ陶器堅緻者集韻ニ瓷或作甆俗改作甆瓻ニといへり又本經逢原 巻一 に白磁器に作れり其餘青磁碗 本草 秘色磁器 侯鯖録 磁鑪 清齋位置 磁罈 茶箋 磁礶 文房清事 花磁盞 剪燈新話 等の類瓷と磁に作る例甚多し諧聲品字箋 両集 思声 第十二 磁の字に注に磁石吸鐵石也といへりて其下に又今以瓦器之質細者為磁といへり正字通康熙字典等に此義と載し

両丘ノ十

齊物家 ヘアズミカクスギタ

荻蘆竹（ヨシタケ）

ヨシダケ又一名ダンチク 筑前〇淡竹と 和漢同名異物 又アセ 紀伊と
いふ暖地の海邊に多し形状蘆（アシ）或ハ荻に似て大なり
高さ丈許葉ハ蜀黍（タウキビ）に似て長く濶く莖の巨さ大なる
ハ周圍三寸餘處々に節ありて竹の如し農家に之を植
ゑ栽て藩籬とし春秋に枝を截捭（キリサシ）て能活る筍の味苦
し水に浸し苦味を去りて食ふ大和本草 巻九 に瘍醫筍ヲ
取リ日ニ曝シ楊梅瘡ノ藥ニ加ヘ用フレハ能毒気ヲ
泄下ス為妙藥味苦寒ナル故ナリ此生竹ヲワリテ炭
火ノ上ニ渡シ其上ニ炙リ物ヲ置テアブル火盛ナレ圧
竹ヤケズ鉄橋ニ換用フといふ按ずるに宋の賛寧の
筍譜 巻上 に秋蘆竹筍其竹似蘆身如荻冬天不凋插枝
如生筍可食也といふ是なり 按ずるに秋ハ荻の誤りなり 明の倪紀字の本草彙言
巻十六 荻蘆竹と作る従ふべし
直云清の莊大中の東安縣志 巻四 に蘆荻竹あり形状
をいはざれども本條と同物なるべし又續修臺灣
府志 巻十八 に蘆竹ハ似黍生水涯濕處といへるも亦同
物なり 蘆竹ト同名別物
筍譜に荻蘆竹を載て又別に蘆竹を載す ハ世に呼ぶ処のアシなり混ずべからず
又本草彙言に荻蘆竹の外に蘆竹を載て加可以為箭と云ふ 別にて [illegible]

編上ノ十七

枝虫（エダムシ）

又名竹ノフシ漢名いまだ考へず形状圖の如く長短
の二種あり長きは四五寸許節多く六足至りて細く長
し頭に二毛あり青黒褐色或は黄斑文ある者（物）あり多
く水邊の樹枝にありて是れ水蠆（ヤゴ）の化するなり　水蠆に品類多し又
蜻蛉に化る　又一種清瀆中にありて長さ二三寸同形
のものあり
にして青黒色七節ある者（物）を七フシといふ

自然生緑蓍

文政紀元戊寅の秋熊野（花月莊）の揚枝答銅穴中より自然生の

り八韓書ト思フニ
緑礬ノ中ニモトリニハ
見エサルカ
自然生モノ凡日ヲ見サル
ハ緑色ニアラス品物ヲ
知ラテ如此評ナスハイカヾ
自然生ニ緑色ノモアリヤ

緑礬と出る事も上品なり中にも大塊の者は高さ六尺五寸許幅二尺餘小巌の形をなして緑色透明瑠璃の如く實に觀美なり（緑礬を久く風日にあてれは外の色變を打破は中の色初の如し）按するに本草綱目 巻十一 蘇恭か說に緑礬新出窟未見風者正如琉璃色人以為石膽といひ明の宋應星の天工開物 巻十一 山陝燒取硫黃山上其滓棄地二三年後雨水浸淋精液流入溝麓中自然結成皂礬取而貨用不假煎煉其中色佳者取以混石膽といへり唐山にも自然生の緑礬を産せしと見えたり

石膽の久く日色をまじへても異なる

小松寄生

本草綱目 巻三十七 桑上寄生の集解に韓保昇か曰是烏鳥食一物子糞落樹上感氣而生と寇宗奭これを駁して若以為烏食物子落枝節間感氣而生則麥當生麥穀當生穀不當生此一物也といへり本草啓蒙 巻三十三 に寇氏の說明なりとし按するに予先年奥熊野北山組（郷）桃崎村を過るに或家盆種の小松に寄生ありて造化の氣に感して生るといへとも僅高さ二尺許の小松に寄生有ることを甚珍として是れを主人に問に答て曰或時

云草木育種後編上巻寄生の説と[illegible]
[illegible]

村漢（ムラノカタコ）戯に此盆種の松皮有て爪して松寄生子を其間に納置翌日之を見れは松脂出て子を纏へり数日を経て芽を生して今かくの如し其後他木に寄生子を納るに絶て生する事なし松には松寄生子を皮鏬間に納て生する事度々ありといふ之を以て見るときは諸鳥松寄生子を食ひ松樹皮間に落る時は即生するといへり故に木の老嫩に拘らす寄生あるなり韓寇二氏の説粗漏といふへし

鼾齁

齁 呼候切
⿰鼻圭 胡回切 ⿰鼻夾
⿰鼻合 並呼洽切
鼾 許及切

本草綱目巻七白瓷器の附方に鼾齁の字あり鼾の字は書にみえし一本の本綱に⿰鼻圭齁に作り又一本に⿰鼻夾齁或は⿰鼻合齁に作れり按するに唐類函巻一百九十五に後漢の王延寿か王孫賦を載て鼻⿰鼻圭齁以鼾⿰鼻夾の文あり註に皆鼻息也といへり又群玉海篇巻七に⿰鼻夾音瞎齁⿰鼻夾鼻息也⿰鼻合同⿰鼻夾といへり⿰鼻圭⿰鼻夾⿰鼻合の三字何れを用ひても害なし

満天星（ハクテウゲ）

白丁花は今人家檐滴（アマダレ）の下に多く栽る。灌木にして高さ数尺に過

[illegible]上ノナ[illegible]

以葉細小にして密に對生し夏月葉間に小白花を開
き形丁香に似たり故に名づく又千葉の物あり　直云近年紫花の物あり
蘭山翁の十品考に陽春縣志を引て云満天星樹ハ
高サ尺餘葉細ニシテ而密ニ開ニ小白花ヲ可シ以テ栽ニ軒檻之前ニ以テ為ス清玩ト　中　上
ト即花鏡ノ六月雪和名ハクテウケ九州方言バンテ
イシ即満天星ノ音也といへり按るに漳州府志　巻三
十八に噴雪花ハ白ッ小細ニシテ雪ノ如ニ乱點ストいへるも亦白丁
花なるへし　雪柳を噴雪花に充る説ハ誤り　雪柳ハ和漢の珍花なれ　㊂豐文ニ云ヘシ
直接するに満天星に同名あり群芳譜三　貞部三　花譜　菊の下

に載る満天星ハ菊の一種俗にテンギクといふ者
なり又唐の韋巨源か食譜　唐代叢書三集第六冊收之　に満天星と
載て注に金米とあるハ果子中の纏糖（コンペイタウ）とかの事なり　直云一説
十品考の満天星（ハクテウケ）と六月雪と同物とせるハ誤ならん　説に
秘傳花鏡　六月雪一名悉茗亦名ニ素馨トといへる
に依て素馨の事とせり然とも花鏡　巻三　六月雪を載せ
る外別に　巻五　素馨を載るとそ按ハ悉茗素馨の二
名を六月雪の條へ誤て混し入る者なりかくの如き
の誤り花鏡中にも多し花卉百種に六月雪を圖せる

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4〜6,附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

ところ小全く白丁花なり又花彦石旅下巻の花賊中ニ満天星と
載て注に淡雪といひ又六月雪とも別に出せるも是れハ白丁花の外一種なりといへり筆者
注なるにハ何物として考ふへきや

含水瑪瑙

村瀬栲亭の秇苑日渉巻十二に云秋田阿邇山中出含水石土人常鑿石巌采之間白如瑪瑙大小不一瑩明視之其内皆含水或有如龍者在其中顛倒之則蜿蜒上下余嘗得数枚然大者絶少此即璚漿石也周公謹煙雲過眼録曰璚漿石ハ漿水石瑪瑙也二寸許遍塊右耳覯之滴水在内揺之則上下流動明会典有漿水玉盞亦此物又格古要論曰瑪瑙有淡水花者謂之漿水瑪瑙古今事物考花作色

直云煙雲過眼録ニ雲烟雲烟過眼録四巻正叙笈中收之観本書作視

瑪瑙ノ一種非含水者 按るに雲煙過眼録の璚漿石ハ貯水瑪瑙なるへし 雲根志三編に奥州津軽に産する赤色或ハ斑文の瑪瑙にして大さ桃栗許透徹鮮明石中空虚にして豆粒許の水を貯ふといへり予先年伊勢国坂山にて二寸許の黄瑪瑙にして含水なる者を得たり土人水入玉と呼ふ大雨の後に稀に出ることなりといふ又格古要論の漿水瑪瑙ハ水色なる模様あるをいふなりこれ亦本邦産なるになり

直云文化十一甲戌年三月予熊野採薬の時佐野荘

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

目覚島(メサメシマ)にて醤斑馬瑙あるをいふ紫紅花点の形揩にして長さ
一寸半許厚さ四分許の含水の者を得たり方言に
し至て観美にして愛玩すへし

鱧魚 即七星魚

本草和名第十六巻 小波年和名鈔九巻十 小波魚と訓せる
り今に至り其誤を来すこと久し 直云新撰字鏡の魚部七十一に鯛と太
比と訓せるの外に鱧と載てあるを太比と訓せるから
えあるし又和漢三才図会巻五十に鱧とハ八ツ目宇奈岐
に充てハモに充つる説を非とせる
も真の鱧魚を知らさる故に誤れる也 鱧魚ハ和産詳ならす
舶来風乾の者塩蔵の者稀にあり本草啓蒙巻四十

に其形状を載まハ茲に略す 直云平賀氏の物類品隲
巻五に風乾鱧魚の図を載す又享和三癸亥の年清商孟涵九治鱧魚数尾を齎し
来り翌文化元甲子の年東都に致る風乾して枯瘁せ
る者と形色大に異なり先年其図を得て模写を栗本
氏の説と併せ出すこと左の如し

国立国会図書館 タイトル『桃洞遺筆. 巻4〜6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

往歲肅　命清國商孟涵九者使獻其北地所產之
黒鯉乃崎藩鎮臺肥田豊後守忠篤　上進文化甲子
六月五日也始儀來十餘頭今存活者七頭時余與尚
藥常春院中川老先生侍
御前屢賜觀因得審其形狀實異平之餘澤千載之
奇遇也形長體圓細鱗青黒有斑点花文背腹有鬣連
尾無歧頭尾相等其斑文頗類蝮蛇狀甚可憎全身
有滑難捏此鯉魚泥鰍之屬止以花文可觀又有
鱗為異耳余按與本草時珍所說相符合可謂能盡其
狀矣此物本邦無產故先輩以相似之魚強誤充之皆
非也今也舶來致存活者于東都得始親觀之多年疑
惑一旦豁然發明于此余飲將之餘遂手自寫真私弄
之頃中川老先生請再摹之并孟涵九所筆產地養法
一頁録之余不敢辭官暇揮拙毫而應其需且添記其
異名一二以贈焉

鱧魚　正字通　一名黒鱧通雅
音里　食物本草　吳氏本草　七星魚

備要本草從新
徐而庵醫遁

文化甲戌三月十三日　栗本瑞見法眼源昌藏識

国直云明の謝肇淛の文海披沙巻二に蜥蜴を又名蛇医とふハ誤りなり蜥蜴ハ石龍子の一名なり

蛇醫（ヤモリ）

本草巻四十三石龍子（トカゲ）ノ集解ニ出る一名蛇師又蛇舅母と
そいふ本草啓蒙巻三十九ニ大和本草ニ載るシヽムシの
事とす又一説ニ石龍子の一種褐色にして痩たる者
とす二説倶に非なり誤なり按るに本州日高郡
山中處々に産する方言ヤモリ又ヤブドヂヤウと
呼ふ者あり草間或ハ竹林中にあり形石龍子より短
く脊肉肥て青黒色に白斑あり腹白し頭大に尾短く
四足五指なり蘇恭の説に生山谷頭大尾小而短色青
黄或白斑也といへるに符合す是真の蛇醫なり其性
至て死しかたし先年栗本瑞見戎公に告て紀伊日
高奥に蛤蚧あり方言山モリと呼ふと聞く願くハ活
生の者を賜らんと乞ふによて官より予に命して
日高山中に遣しこれを捕へしむ時に二月十三日な
り即これを東都に送り後四月十九日産物會に出る
とき猶死せすして活動常の如し尤蛤蚧にあらすこの
蛇醫を誤り見る者なり

山㹀（ヤマウバ）ノ休木（ヤスメギ）

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

又馬カ
馬ハ別法

即チ関ヨリ採

深山陰地に産し殊に熊野生駒社の山に多し小木にして枝幹ともに白色にて蝋を塗るが如く葉はなし又山ノ神ノバリタレ木ともいふ

○秦吉了（サルカ）

和産なし舶来多し長崎にてサルカ又九官鳥といふ清商九官といふ者始て将来せる故に名づくといふ九官または鳩喚或は九譲に作る大さツムギ許にして全身黒く光あり嘴赤く脚黄に頭の後に左右に黄色の肉あり嶺表録異に両眼後夾脳有黄肉冠といふ是なり雄の本に微に白き処あり唐山にては全く

白色の者ありと見ゆ同書に容州有純白色者倶未之見也といへり 直按ずるに容州云々の文唐代叢書中の本によりて引きしものなり格致鏡原に嶺表録異を引て純の字の上に純赤の二字あり補ふべし北戸録にも善窠に有廣州民獲赤白吉了各一頭献于刺史とこえあり純赤の者もいまだ舶来なし 又廣東新語巻二十會語に以眼為別黄者金吉了白者銀吉了黒者鐵吉了の三品尤下といへり此鳥人言を能する鸚鵡は其声高けれども明ならざれ吉了は声甚卑けれども長言を能くし細砕の語もよく通ず故に諸書に秦吉了は能く言ふ鸚鵡に勝ると云ひ桂海虞衡志に秦吉了能人言比鸚鵡尤慧大抵鸚鵡如児女吉了

了ハ聲則如丈夫といへり
直云秦吉了ハ一名結遼鳥（唐書林邑傳）了鵒（格致鏡原引唐會要）了
歌（南寧府志）了哥（日詢手鏡）秦結了（廣輿記）。秦吉鳥（東西洋考占城土産）
秦鵠鴝（清来元成羽族通譜）吉了（桂海禽志）。黠獠（明高啓詩）通雅情急了（謝氏）
詩源、

青田石（ラフセキ）

今印章ニ用ふる蝋石ハ和名なり漢名青田石（考槃餘事）一
名圖書石（格致鏡原）といふ本邦諸州ニ産せしとも多く
ハ其質堅硬ニして光彩なく下品なり船来ニ種ゝあ
り古渡ニ人物及器物ニ造る者其色或ハ碧縹或ハ黯
緑或ハ淡白或ハ淡黄或ハ淡赤其質堅硬なれとも光彩
瑩潔ニして玉の如く上品なる者多し今渡る者ハ和
産ニ較ふれハ其品優れとも多くハ其質堅硬ニして其
色種ゝあれとも光彩少く下品ニして上品ハ稀なり
又福州の壽山より出る者を寿山石といふ祝穆か方
輿勝覧（巻之十）福州土産ニ壽山石ハ出ツ懐安縣稷下里ニ潔淨
頗如玉柔而易攻盂琖類といへる是なりされも先年来れ
るとれハ其色種ゝありて光澤うるはしく質軟ニして

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆．巻4～6，附録』　請求記号 W391-N2
ガラス使用

上品なり新渡ハ多く赤白の二色にして光沢なく質
硬く脉理ありて下品なり試金石に代用ス唐山にて
も青田石寿山石ともに後世に至り上品の若稀なる
こと尤に載るか如し　清の高士奇ヵ江村帰田集 巻十二
に云凍石舊時処州山中往々従璞中剖出初本輙臓見
風拈結為石故名曰凍其色或淡白淡黄淡青光沢可愛
以之鐫刻圖記遠勝銅玉近惟青田舊坑間尚有之凍石
絶不可得矣 中略 若閩中寿山石雖璀璨可愛然鐫処易刓
印油易染賞鑒家仍以凍石為重　清の王士禎ヵ香祖

筆記 巻十二 に云印章舊尚青田石以燈光為貴三十年来
閩寿山石出質温栗宜鐫刻而五色相映光采四射紅如
靺鞨黄如蒸栗白如珂雪時競尚之価与燈光石相埒近
芥鑿日久山脉枯竭或以芙蓉山石充之無復宝色其直
亦不及寿山五之一矣二山皆在福州
直云青田石の上品を燈光石 考槃餘事 一名燈光凍石 甘氏
印正 附説 燈明石 七脩類藁 凍石集 帰田 と名く一説には燈光石
と凍石と別物とされハ物理小識 巻七 青田石之
心為凍石如蝋者曰蝋凍光明者曰燈光近心者為豆

青次ヵ封門青圖書取之といへるにてしれるなるべし然ともに燈光石凍石の二名總て端石の上品とさるべし既に香祖筆記と同作の居易録巻十七にも壽山石を載て筆記の價與燈光石相埒の七字を其價幾與凍石相埒の八字に作れり

猨 猿同字

俗にテナガサル又エンコウ（猿と猴との二物を併せて一語として一物の名に呼べり）なり和産なし文化六己巳の夏六月荷蘭の商舶儀を崎嶴に来る者に同年の冬十一月浪華より我藩に轉致し

一里山庚申堂は境内にて觀物に備ふ利未亞洲の東北亞毘心城國の産なりといふ形状常の獼猴より大にして頭面及全身黒色にして其毛長く柔に兩臂至て長くして身に倍ん性慧にして馴やすし養ふに菓實類を食ましむれば腹瀉も常に寒具の類をもて養ふといふ唐山にハ猿に品類多しと見ゆ按るに此猿は桂海虞衡志獸志に純黒者面亦黒といひ嶺南雜記巻下に烏猨出羅定州及石城渾身如墨止眼瑠璃白即舌亦黒也短身長臂臂倍于身行走如人性甚警慧余攜歸畜之

甚馴といへるもの是なるべし又諸書に猿の臂甚長

くして能氣を引肩に通ずる事といふ今此猿をもて

試るに然らず惟両臂長きのみなり通臂の説（本草綱目巻五十一下 内中の謂子或言其若猴矣とぞ之り）

誤りなるべし

祝穆 方輿勝覧巻三十七 新州土産に桂山有黒猿といひ

直按するに居易録巻十 李戸部ノ説ニ蜀ニ有二黒猿一通體黧

黒可レ愛常ニ于樹上ニ騰跳足不レ履レ地獵者不レ能レ獲といふ

も同物なるべし世にいへる通臂の説は謬りなることを明

の嘉靖中呉興の王濟の日詢手鏡一巻を著して其

中にて辨せり 紀録彙編巻一百六十三収レ之

荷包牡丹（ケマンサウ）

今人家及花戸に多くうゑ花鬘サウとも又花鬘牡丹ともよぶに秋伝花鏡（巻五）に載る荷包牡丹なり一名魚児牡丹以其葉類牡丹花似荷包亦以二月開因是得名一幹十余朶累〻相比枝不能勝壓而下垂若俛首然以次而開色最嬌艶（根可分栽若肥多則花更茂而鮮黄梅雨時亦可扦活）とみへるにて形状明らかなり魚児牡丹の名は宋の時より呼へるにや格致鏡原（巻七十一）に宋の周必大か魚児牡丹の詩の序を引て得之湘中花紅而蕊白状類双魚累〻相比枝

不勝壓而下垂葉与牡丹無異亦以二月開といへり又花卉百種に穿線牡丹ともいへり

直按するに今はまた朝鮮牡丹ともいふ高士奇か苑西集（巻五）に朝鮮牡丹と題せる詩三首を載せて第一詩の瓠子含新蕚荷嚢綴細枝の句注に俗呼為荷包牡丹といひ第三詩の弱蔕看成串鮮葩巧合双の句注に越中名線穿牡丹といへり（線穿の二字花卉百種と転倒せり）又朱彝尊か日下旧聞（巻三十八）補遺に呂毖か六街花事を引て荷包牡丹草本一名朝鮮牡丹（注文略）といへり或説に此

草本邦へハ延寶年中唐山より始て来る品といへ
とも關白兼良公の尺素往来群書類從第一百四小消息部收之
茬蔓花を出せるときれハ延寶より二百年餘以前
にも猶ありし艸なり

龍骨木（キリンカク）

桂海虞衡志草木志云龍骨木色翠青状如枯骨南寧府
志卷三云龍骨廣州人呼為火殃酉陽雜俎中有慎火木即
此蘭山先生の十品考に右の二説を引て麒麟角に
充る従ふべし麒麟角ハ今種樹家に多し形状人の志

る処なれハ畧ス花ハ夏の末秋の初に幹頭及葉間に
生ス形小くして五瓣黄褐色紅蕋を吐き瓣堅硬にし
て謝しかたし後五稜の小実を結ぶ莖葉を截れハ
白汁出づ直云今花姑に呼て獅子と花暦百詠卷下の百
とるいふもおハ甚変生なり
花賦考に覇王樹一種方長類鋼者號覇王鞭といへる
も麒麟角なり又一説に中山傳信録（直云足阳漫録ニ詳ニアリ）卷六の吉姑羅と同
物とス且とも其文に一名ハ火鳳人家牆上多ク植之以辟
火幹似覇王鞭草葉似慎火草花似黄菊亦有紅者名福
禄木とあり似覇王鞭といへハ別物なるべし

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆．巻4～6，附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

直指せるに酉陽雑俎十九 前集巻に廣州有慎火樹々大三
四圍慎火即景天也俗呼為護火草といへる慎火木
と南寧府志に龍骨木也一物と此君子堂日詢手鏡
に龍骨木の形状を解せと詳にして其下に雑俎の
慎火木或は別種ならんと疑へり其文に云有樹曰
龍骨其根大者如梧樓幹如脊而遍新發者亦然根至
顛頂皆有刺以之編籬堅過於墉伐枝插地即活皮色
青翠可愛葉如楊梅十月後脱至三月發幹葉倶有白
汁其花黄心紅瓣蒂著幹廣東又呼為火殃 事物紺珠作火殃樹

張衡西京賦注
瘡痏謂瘢痕

酉陽雑俎中有慎火木亦名護火多種盆缶中置屋上
開紅白花倦遊録以雑俎所云者即龍骨樹又名烽火
木断之有白汁所見龍骨誠如倦遊録所言但不言有
刺以其稱龍骨故畧之爾若云其汁着人肌膚遂成瘡
痏則余未之知意者雑俎所載慎火木或別有種とと
訛一説なり又唐類函 巻一百八十五草部一 に南越志と引て
廣州有樹可以禦火山北謂之慎火或謂之戒火多種
屋上以防火也但南中無霜雪故成樹となるか恐く
は景天の暖地にて茄樹の如く數年不枯者とみなるん

又格致鏡原巻廿十三花類四小蘂志を引て龍骨花といふ華夷花木考巻四

ハ別物なり又吉田坦藏篁墩か近聞偶筆巻一に寄園寄

所寄格致鏡原等の金剛纂を載て龍骨木と同物と

いふ誤りなり金剛纂ハ本邦に産せしいふ別條に詳にす

桃洞遺筆巻之六目録　第二輯下

山藤　獼子鳥

榕　附 榕葷 雅加都 萬都厘　璹瑁

攤叙　附 都厘 耆伽尼　相思子

把雑扇　貴妃粉

蕃椒

二編附録

天蠶絲　附 天蠶蟲　四足雞

初編補遺三條　蓮荷花草　暴ニ雞　有足蛇

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6,附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用

金頂砲　雪洒

小鹿　豹

淡州黒木　臙脂木

僕奈　山藍

山蕪

續文献通考巻二十九 征権考八雑征中に 黄藤鞭桿 此然柳の鞭なるべし

注 呂宗義庚集ニ桿音敢 短杖也 如拜桿鞭桿之類

故に東都にて鍼鞭また鞭カヅラと呼ふ 此外諸州の方言多し

蔓延に贖に載 按するに救荒本草巻九 黄絲藤生輝県太行山山谷中 條類葛條 葉似小桜刺葉而小 又似婆枕頭葉 頗硬 背微白 辺有細鋸歯 味甜 といへるも同物なるべし

兵法雄鑑抄第四十五の鞭可造事の條に木ハ然柳を用ゆ長二尺八寸なるべし云々

直按するに熊柳を雄鑑口義巻坤に熊藤といふ又勝弦ともいふに寛正中の人中原豊後守高忠カ軍陣聞書群書類従巻四百十九武家部廿收之に征矢とおなしく鞭むちまたへ書鞭のこしらへ様の事二尺八寸也

熊柳とも可用くは柳とは勝弦といふ也 神宮皇后異国退治の御時勝弦を鞭になし給ひて此く給へしとて諸神さしなり夫より今に用ひ来る事なり勝弦は秘事なるによりて人知らす熊柳と申来るなり二尺八寸は廿八宿をかたどる也六寸にとるを法とするなり六寸のうち五分先を残して穴をあけ緒をとをし鞭の手元になりての入れやうに結ふ也緒の事は二尺八寸は手にて計るべしといへり

建櫜設略巻四鞭の條に軍用五木ノ策の一ニシテ熊柳ハ黒塗白藤ニテ巻ク軍陣ニ用フ社参持之トいへり

名臈字作臈ハ
蠟觜鳥同字
蠟觜字…

獦字之説
故名
ヨリテ見ルニアトリハ
トリノ略ニテアトリ
ヒシカアトリトナレル
アトモフハ人ヲ奪ヒ
古え

獦子鳥

萬葉集第二十の阿等利ハ和名鈔ハ巻十ニ辨色立成ニ云臈觜鳥 阿止里 一云胡雀○直云新撰字鏡鳥部六十三ニ臈臈と朧に作る玉篇巻二十月部ニ臈ハ朧ノ俗といへりて同字なり一説ニハ臈ハ蠟の誤りにて蠟觜鳥ハ桑鳲の一名なり鄭樵か爾雅注巻下ニ出るつこ秘を誤り見しなるへしといへり按するに此説志うへし既ニ鄭樵ハ昆虫䖝巻ニ蠟觜 楊氏と臈觜ニ誤り作きり又胡雀ハいまた考へ尺

漢語抄ニ云獦子鳥 和名上ニ同シ今按ニ両説所出未詳但シ本朝國史ニ用猲子鳥又或説ニ云此鳥群飛ノ如ニ列卒ノ之満ニ山林ニ故ニ名ニ猲子鳥ト也○直云國史ニ用猲子鳥といへり今の本猲と臈ニ作きり下ニ見ゆ又字鏡ニハ猲と獵ニ作きり字書を按するに猲ハ音葛獣ノ名獵ハ音鬣田獵之獵ニ字音義別なり又猲ニ獵の音なきとも戎姓なり俗ニ作ニ田獵ノ字ヲ非也と広韻入声巻第五に載より

此鳥秋月多く来る 直按するに常陸國誌巻ノ四ニ云古老相傳フ東南海中ニ有島無知ニ其大小遠近ヲ者鶻燕臘子鳥等常ニ来自ニ此島ニ其ノ来ルヤ必ス乗ニ東南風ニ来リ其去ルヤ必ス乗ニ西北風ニ去ル 形状ハ本朝食鑑巻六ニ其大サ如レ雀頭頸灰青色有ニ黒斑ニ頷觜黄赤背蒼黒帯フ赤ヲ有ニ黒斑ニ臆腹赤色帯フ黒腹下黄白翅尾黒脚黄赤色其味苦ク不佳ナラとつらねて明らかなり 直按するに呼子鳥といへり鳥大さ雀に大ぶり毛色黒白加々色交折り見事なる鳥也年々重ねていとノ〳〵見事なる鳥なれ然きとも囀りなく多く漢名未た考へ得き鳥にて飼鳥の下品なりといへり

松岡玄達の本草一家言巻八に花雞ハ充る是非知へからぬ其文に曰花雞和名獦子鳥其形畧 此鳥数十為ニ群ヲ来リ集メ于樸樹或ハ城壁ニ而死ス故ニ俗諺ニ人以テ進退躁卒ニ失度ヲ謂

如花雛ノ拔伏是也通州志云花雞秋ヨリ來自海東外大者
名麻雛ト直按るに小格致鏡原巻八十小事物紺珠を引
て花雞似テ小雛雞秋ヨリ來自海東大者名麻雛と
いへるとうちかひ的
當ともなしのるし
直云日本書紀巻二十八　天武帝白鳳七年十二月
癸巳朔乙卯臘子鳥弊天自西南飛東北同九年十一
月辛丑臘子鳥弊天自東南飛以度西北といへり又
巻十九　欽明帝二年三月の條に臘鳥とあり
傍注小臈觜鳥小作り舊事紀巻九小臈觜鳥小作り
古事記巻下小足取小作もり又異本釈日本紀巻十
五小廿八巻臈子鳥私記に曰愚按十九巻為臈觜鳥今
此ニ改テ臈觜為子可考求といへり

又續日本後紀巻十七
仁明帝承和十四年三月戊寅羣鳥億萬繞日上下自
日中到黄昏御着空中不知何鳥とありまる是同数
有群鳥遅明自西方度東方具夕覆天終始不見諸
諸故老二一本脱老字皆云未曾聞之者といふれ阿止里な
るべし

榕　附　榕蕈　雅都萬廖

榕　晉の嵇含が南方草木状巻中に始て形状を載以漢

茶详注巻三十一
或作榑言材中梓人用也
倒生木　西苑

許慎の説文解字木部（巻六上）𥐟の注に松或従容とありて松
の重文とせし（玉篇松注𥐟は松の古文とす）は誤なる事正字通下辰集松榕二字の註に辨
せり　榕ハ餘封切音容。直指をるに廣東新語巻廿五に
云榕ハ容也常ニ為ニ大厦ヲ以容レ人能ク庇ニ風雨ヲ又以テ材無キ所
可用為ニ斤斧ノ所ニ容故ニ曰　一名榑　直云華夷花木考巻三に
榕自容亦能容人也　宋志ニ引ニ海物異名記ヲ云榕
或作榑言材不中梓人也といへり字書に榑音庸　一名
梼榑ハ木中笥笱といひて榕と同字のことゝれし
不死木（物理小識）一名倒生樹（廣東新語）嶺表録異ニ曰榕樹桂廣
容南府郭之内多栽此樹葉如冬青秋冬不凋枝條既繁
又蒙細而根鬚繚繞枝幹屈盤上生嫩條如藤垂下漸及
地藤梢入土根節成一大榕樹三五處有根者又横枝着

茶详注三十一

隣樹則連理南人以謂常不謂之瑞木　明の王世懋り
閩部疏ニ曰榕ハ賤木也材不中器爨不生焔至福州始多
故以名城　直指をるに明の凌登名の榕城隨筆に云閩中多榕樹因號
榕城とまて　華夷考ニ志書云　榕樹生至福州而止因
呼福州為榕城云
然至漳泉間更多而鍾扶疎旁出根如流蘇下
埀着幹即抱負為一輪囷連峯好作怪状具根盤地峻嶒
蚪臥恒敵許多根故易茂而難拔不才故寡伐而長壽具
自處暗與道合者居民植之以當堪輿之屏翳行子頼之
以為憩息之嘉庇豈所謂無用之用耶　嶺南雜記巻下曰
榕樹閩廣最多也省則無故紅梅驛以北無榕大者蔭十

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用

餘畝離奇古怪備木之異衛署多植以為蔭然體曲不中
梁柱理斜不中材用質虚不中薪爨荘子所謂以不材而
壽者也漳浦黄石齋先生有榕頌其木年久者常結伽南
香焚之致鶴植于水際其子可以肥魚細枝曝乾束為炬
風雨不滅其鬚製薬可以固歯 直挿をるに龍威秘書二
雲仙雑記を収めたり小児瘡痂以榕粉日傳之則易瘥而
無痕出汗漫録といへるハ榕鬚なとを粉となしたる
ものな 其脂乳可以貼金接物與漆相似嗚呼人但知有
るべし
用之用而不知無用之用也 此樹薩摩ニ産ス方言ア
カウといふ又本州ニては 南海部郡の衣奈浦荘より日高郡三尾荘

比井浦の邊までの間處々ニ産ス方言ホホギノ木と
いふ大なるハ高さ数十丈圍数抱葉ハ冬不凋して三
月頃新葉生し舊葉落ること交譲木の如し 直挿をる
に尾張の
舎人重巨ヵ草木性譜の巻ニ榕を載て其葉冬青葉
葉冬凋落すといふ此土地の異なる歟
は似て潤く天仙果葉は似て厚く紋脈異なり茎葉共に
斷は白汁出る七月頃花無くして本幹及孫枝所々に不定に
小して実を結ぶ形無花果に似て小く初青緑色に白點
あり熟して紅紫色黄點は変じ果中も赤無花果の如
く味甘し日高の小児イヤウノミといひ採て食用と

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6,附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

此樹経年の者ハ本幹及枝上より長細根下垂して次の
枝に着き其着ける枝より又長細根下垂して又次の
枝に着き如此せることを幾数にして根梢地に入て復
纖幹を叢生し後にハ怪状をなせり識に南方の一奇樹
なり日高の小児其根を細と称し弄ぶ四五尺より長
き者ハ数丈に至る 直按するに広東新語云榕之怪在根ニ自上生下語ニ曰榕木倒ニ生ス根ヲ小ニシ
者俗ニ称ス榕鬚ト拂水生波千絲萬縷始為鬚中為根終為幹
故ニ幹在中新幹在外表裏相合状益臃腫可愛也と
其枝霧雨中に挿き能活ハ其幹大なるハ中空になりて
質脆し材となすへからす又此樹に生ずる菌をオホギ菌と

いふ羹となし食ハ味美にして玉蕈に勝る毒なし 直按
するに怡顔齋菌品木蕈類に榕蕈達按ニ榕樹薩州ニ
多シ土人アカウノ木ト呼フ此樹ニ菌ヲ生ス アカウナ
バト名ク西州ノ人菌ヲナバト云フ此菌椎タケニ似
テ大也色白ク味美シ生乾ニ食フベシ但シ久シク
蓄フベカラズ といふ是なり
直云一説に榕の一種薩摩大島の方言ガツマルと
いふ者あり形状榕と同しくして高大なり枝幹の
根鬚榕よりも多く生して怪状をなし易し閩書の赤
榕なりといふ按するに閩書巻百五十に榕有二種一種
矮而盤桓其鬚着地復生為樹一名赤榕上聳高大一名

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

大とかくして……（頭注、判読困難）

以下ノ八字（華夷考巻ノ三ニ作ル）一下ト
種ノ名ナリ赤榕ト最モ高大ナル九字ノ上
纏樹かれて始めは中々ある一種榕生する者本州にも
見當らば赤榕は直生高大なる者本州の産と同物なる
るべきを而して何にまりて赤の字を冠せるや詳
ならば又大島のガジマルを桃果なる種とも
なく。其地本州よりは猶暖和なれば樹も高大に根
鬚も生じ易き也とて別種のやうにいへるならべし然
もと予未だガジマルなる樹を目撃せねば其土の
人に正すべし

本州産と同物なれども

又奥熊野鵜殿なる宮山に産する花以

同名
チガナリをいふ荷ありしが桃も所ありてガジ
マルといふ別條に詳なれば○直又云環海異聞巻十
漂流人魯西亞都府滞留中の條に漂流人ども一日國
主の涼所といふ處へ遣はされ一見せしに其廣
庭の内に長さ一町程の棚を架し是に纏ひたる
男木あり此を同為の枝葉をもて根ともなりし
根は甚だ葉は樟に似て圓し花は紫にて藤の如
しと書かるるを大槻氏南方草木状なるを引きて榕樹
形なるべきと載せたるは純榕樹の真物と志ずる

十九

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6,附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

故にかく謬れるなり榕は藤享のごとき花さける者にの
られ本文にいへるごとく花無きものなり廣東新語に
も「榕子無花」といへり又同書に榕ハ性畏寒踰梅嶺則
不生とありて晋西亞國の如き寒地に育ふべきにと
かにあらば前に載る引書の外に桂海虞衡志 草木志
赤雅 巻中 泉南雜志 巻下 海槎餘録 粤西偶記 閩小紀 巻上 廣
東月令 四月條 蒼暘雜記 巻三 巻四 すべて閩廣諸州の通志府
志州志縣志類に載せ 北地の事を記したる書には載
すことなし。また齊民要術 巻十 通雅 巻四十三 五雜組 群

芳譜 利部七 檜條 品字箋 乙集中 諸 康熙字典 辰集中 淵鑑類函 巻四百十六 格致鏡原 巻六十五 其餘諸書に載せたるも皆閩中また
産せる事にのみして其より以北に生ずる事にかくれ
是なりて以ふを證とすべし

瑇瑁 音代妹

瑇瑁 史記司馬相如傳 和漢通名なり瑁の字古文に玥 説文解字
又玥 玉篇 に作る又瑇瑁の字蝳蝐 文選 蝳蝐 陽詡飛白書 正字通引歐 毒 文選
冒 省字。前漢ノ地理志ニ師古ガ注ニ曰 玳瑁 玉篇ニ玳 等に作る
毒 音代 冒ハ莫内ノ反通ジ作ル玳瑇 俗字
一名 代尾 本草 郷藥 文甲 典籍便覧 斑希 恩簿 氷族加點化使者 同上 寶除

玳瑁 廣韻巻五
廣韻去声第四巻 瑁字注 瑇瑁亦作
帽帽 又瑇字注
亦作蝳蝐

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

雙牙〇東西洋考呂宋ノ方言 舶來ありて全甲にして徑尺
餘の者ありて又片々離れたる者ありて今櫛笄及諸器
皿に用ふる者是なり 俗に鼈甲と呼ぶは誤なり鼈はスッポンにて其甲首飾の具
は造るべき者ならず又偽造の玳瑁に蠵龜甲・牛角
番水牛角馬蹄等を用ふることあり別條に詳載す
和産甲の徑四寸許の者寛保三癸亥の冬十一月加賀
宮腰浦に出て其後石見よりも出しこと本草啓蒙巻四十一
に載あり我本州に在ては一二寸より四五寸まて
此者ハ時々漁人の網に羅りて珍とするにあらず只文
化三丙寅の夏四月七日土佐赤岡浦の海中にて漁人の

獲る者珍とすべし大さ二尺許形状蠵龜に似て首に
喙ありて曲りて鸚鵡の喙に類す背甲ハ十三片 中五片左右各四片總て にして
鱗次をなし蠵亀甲只一片にして六角紋ありて水亀
甲の如くなるに異り其甲淡黒にして黄を帯ひ小なる斑
深黒斑あり裙邊に花ありて鋸歯様をなし又四足ハ
鰭なして前二ツは長く二爪後二ツハ短く一爪なり
其首と四足と倶に鱗ありて蛇皮文の如し下甲ハ水
亀と同しく黄黒色にて尾ハ稍短し又八丈島にハ大
なる者ありといふ按るに桂海虞衡志 異魚志 に曰蠵

十二

十三

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用

蝐形似亀鼈背甲十三片黒白斑文相錯鱗差以成一
背其邊裙闌闞嚙如鋸齒無足而有四鬣前兩鬣長状如
檝後兩鬣極短其上皆有鱗甲以四鬣棹水而行海人養
以噀水飼以小鱗俗傳甲子庚申日輒不食謂之蝳蝐齋
日其説甚俚と 又は俗なと 此形状邦産に的當せり

直按するに背甲十三片の説ともし云ハ海槎餘録
よりも 正字通午集上 背負十三葉といへり 彙苑詳註巻二十四 本草綱目 巻四十五 海島逸史
巻四 等に十二片に作り廣東新語 巻二十三介語 には十四版と
いふハ俱に謬なり

擁劒

本州和歌浦 海部郡雑賀庄 に多く産すテンボガニと俗に斥爪蟹
又ヤリモチ蟹 阿波 といふ形常蟹の如くにして螯一ハ大
きくして赤く一ハ小くして淡赤或ハ淡白なり明の陳
懋学か事言要玄 物集巻五 に擁劒蟹之小者一螯大而長赤
斑色一螯短而白其形類蟛越生海塗上以大螯鬪以小
螯取食螯足無毛又名架歩又名合捕又名蝎朴 直按るに容
齋四筆巻六に呂亢か臨海十二蟹圖と載て三曰擁劒
五曰蝎朴と二種に別てるハ誤なりとも事言要玄に
辯せ又名執火以其大螯赤色也其穴中直究轉穴口泥

園以障水海人舂之作醬謂之蟛蜞蟹之下品此即周禮
庖人曰青州蟹胥是也といひ臺灣府志 巻十八 に有大脚
仙蟹身小一螯大一螯小色赤白相雜といふ是なり又
揭哺子 八閩通志 蝎歩 閩書 歇歩 同上 進劔 廣東新語 等の名あり本草
和名 第十六巻 和名鈔 巻十九 並に加佐女と訓せるハ誤なり
りカサミは蝤蛑なり別條に詳なれハ
又直按するに本州海部郡加太浦にツルギガニといふ
ものあり甲小さく扁くして赤黒色螯脚大にし
て三角刺多しこれ亦擁劔の属なり

相思子

今舶来の相思子を俗に唐アヅキといふ 形状本草啓蒙巻三十一に詳なり 和産なし喬木にして木理細花雲紋ありて紅黄交り甚美なり琵琶槽及扇骨其餘諸器に作りて佳なり物理小識 巻九 に雞翅木と名く（今三絃舗に呼ぶ舶来の本チヤン真チヤンハ此類なるへし）先年京師にて漢種を地に下して生せし者後には大樹となり其葉合歓の葉に似て短しといふ今は枯てなし又享和二壬戌の年新渡の相思子を予地に下せしに五本苗を生ず皆蔓生にして葉は馬棘（コマツナギ）葉の如く茎に互生し長さ三尺

許に至り其冬寒に傷らせ枯る浪華にて蒹葭堂ゟ此
を栽るに又然りといふ段公路の北戸録に相思子有
蔓生者といふ是なるべし
直按ずるに廣東新語 巻二十五木語 に紅豆本名相思子其
葉如槐莢如豆子夏熟珊瑚色大者莢内微扁其可以
飼鸚鵡者乃蔬屬藤蔓子細如菉豆而朱裳黒喙其結
実甚繁乃雜落間物無足貴也其本本者樹大数圍結
子肥碩可玩といへるにて木本藤本の二種ある也
と明らかなり

把雜爾（バサル）

享和元年辛酉の夏京師にて蠻舶来のバサル一名ベ
ソアルを観覧に備ふ全形羊に似て高さ凡三尺許胴の
周圍六尺許総身淡黒色にして両角鐵の如く三段に
巻揚り物に比しがたし圖をみてこゝに示しぬ 按ずるに 鈍鮓
荅獣なり 即清の 南懐仁の坤輿外紀 巻上 に渤泥國有獣名把雜爾
似羊鹿腹内生一石療百病極貴重至百換國主藉以為
利 直すに八紘譯史巻之四に把雜蘭に作る 似羊似鹿腹中生糞石能療百病價重百換 といへる者にして
方観承の松漠草に蒙古西域祈雨以楂達石浸水中呪

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用

平加良太末乃木

古今六帖[illegible]巻物名ニ変則が[illegible]のより乃ゝ[illegible]

うへうひ[illegible]あまと[illegible]ことまのこれを重[illegible]とよみて[illegible]

多三ノ木を[illegible]なるへし[illegible]宗紀[illegible]今のガメノ木を[illegible]

[illegible]本の[illegible]あり[illegible]山[illegible]の[illegible]太[illegible]

多[illegible]常木[illegible]名[illegible]日[illegible]

[illegible]

あ[illegible]

辛夷を[illegible]二三寸許 中才[illegible]本[illegible]

[illegible]正月の[illegible]白色[illegible]

[illegible]中[illegible]仁二三顆[illegible]紫色[illegible]秋[illegible]実[illegible]

[illegible]八[illegible]全の[illegible]

[illegible]神[illegible]のみ

あ[illegible]

[illegible]洛[illegible]の[illegible]

○常[illegible]日向[illegible]カガタ[illegible]木[illegible]

本條[illegible]花[illegible]花タノテバ[illegible]

[illegible]一種[illegible]四[illegible]

枝[illegible]青[illegible]

[illegible]四[illegible]小白[illegible]

[illegible]

之輙驗楂達生駝羊腹中円者如卵扁者如虎腔在腎似
鸚䳇嘴者良色有黄白駝羊有此則漸羸瘠生剖得者尤
靈とゆる駝羊と同物なりといふへし　楂達石ハ鮓荅にして俗にイサラバサラなり
本草啓蒙巻四十六蘭畹摘芳巻三
並に詳に載たれは贅せす
直按するに爾雅釋畜に云羊角三𥎊羷郭注に云羷
角三帀曲角也從角㚒聲音權羷音險○説文解字巻四下角部云羷徐鍇繫傳巻八に云臣鍇按爾
雅注羷巻也衢貞反　まるゐ益部方物畧記に龍羊を載て贊に曰
○羊質而大角繚於首以角之珍軀残獵手注に云出吐
蕃及威茂州形似畜羊而大其角繚之重八九兩黒質

而白文可以為帶胯其用亂犀と此二品も把雑爾の
屬なるべし

貴妃粉

先年東都濟壽館産物會に漢名貴妃粉和名ナヒメと
いふ者出る　直云蘭類の土栗もまた土産處は不詳と
いふ大さ無患子許にして白色塊をなし外よりを視
に直に似て直にあらず土に似て土にあらず割ゐる
事など云ざれば其内知べからず蘭山翁も其席にあり
て何物と考ふべからずと又貴妃粉の名出書未考ずれ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

頭上ノ十云

ふ平其後廣輿記巻八にいへる小陝西西安府の下小貴妃粉ハ馬嵬坡上ノ土白キコト如シ粉ノ女人面有ル黒点者以テ水ニ和シ粉ニ洗フ之即チ除クといへり　直林ある小淵鑑類函巻三百八十一粉の下小此説を引き馬嵬土ともいへりられ説小るれハ土の屬なりる土六メの産処及其性質もしるされ記小是能しるべからん博雅の君子ニて正し正せ又稲府偶書ニ云馬嵬坡有楊妃塚上生白石可為粉名貴妃粉

蕃柳

唐ガキ一名珊瑚ナスビといふ苗の高さ四五尺茎柔弱なり葉ハ艾ニ似て大小棟葉小似て毛あり折れ悪臭あり夏月葉間小五瓣淡黄色を開く花謝して實を結ふ形酸漿の殻苞を去るか如く酸漿より大ひなり熟して赤し食用小ならす搗爛して胡麻油小浸し置て金瘡小傳て佳なりといふ大和本草巻九小稲若水の説を引て天茄子小充るハ誤りなり羣芳譜京部第五果譜二小蕃柳一名ハ六月柿茎似テ蒿ニ高サ四五尺葉ハ似テ艾ニ花ハ似テ榴ニ一枝結フ五実或ハ三四実ツ一樹二三十実縛テ作リ架ヲ最モ堪ヘリ觀ル火傘火珠未タ足ラ為メ喩ト草本也来ル自リ西番ニ故ニ名クといふ是なり直林ある小滂熹小品巻二十七小蕃柳を載せ其文羣芳

譜と大同少異なり

附録二編

天蠶絲　附天蠶虫　小原良直著

今漁人釣縉ニ用ふるテグスは國ニよりグともグスともスヂともいふ漢名天蠶絲南寧府志天蠶綢廣東通志楓絲粤西偶記楓蠶絲本草綱目蟲絲圖書編。明一統志。漳州府志といふ舶来多し品類も亦多し大抵是をチモトとヤヽその二名ニて分ち其中より絲の大小色の異なるニて又品名を分てりチモトは絲円く中央ニて十ミメを称せるを上品とし

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

ヤヽも綵扁に微に稜あり又サカテグスといふは節
の如きその本に着り常のテグスも白根の処本なり
サカテグスも白根の処末なりこれ末より裂けは苧く
ぞある如く成るものなり下品にして其値賤し注音も
此テグスも何物とも志らで或は海草の茎とし或は
海草の根とし誤の甚しきものなり其後テグスを焼
て絹絲の臭氣をなれと明清の諸書に載る説（別に録ん）と
併せ考へて虫絲なる事をも志れどまだ何の虫より生(を)
るてとをと知らざれは本邦に産せざる者とし青木氏

の昆陽漫録（巻三）に南方熱國ノ物ナルベケレドモ種ヲ
得テ試タキモノ也といへり漸く享和壬戌の年土佐
の宮地郁藏（雅則）常毛採薬録二巻を著して其附録に始(め)
て伯耆の方言スカシダワラなるてとをいふされど
其製法をと不識して只傳聞のまゝ記をし者なり其文
に曰先年薩州ノ人琉球ニ在テ虫絲（テグス）ヲ作ルヲ見テ圖
ニテ歸ル其繭スカシダワラト全ク同シ然レ圧既ニ
繭ヲナスモノハ絲トナラズ其虫ヲ養ヒ絲ヲ作ラン
トスル時ヲ候ヒ虫ヲ煮テ絲トス是ハ琉人ノ極秘ニ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆．巻4〜6，附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

シテ薩人ニモシラシメホルヨシ聞りとあり按を
るに天蠶廣東新語一名楓蠶事物紺珠又名樟蟲漳州府志物理小識○廣
東新語巻二十四に天蠶出ニ陽江ニ其食必ス樟楓葉といふ
とこれを天蠶ハ惣名にして楓葉を食ふを楓蚕とい
ひ樟葉を食ふを樟虫といふなり又東安縣志巻四物
産志の虫類に天蚕を載するも外に沙椀ハ腹中ノ絲可レ縫フ蓁
扇とはいへるも天今本邦諸國深山にあり多く八栗
蚕の属なるべし
と椋の二樹に産し又稀に櫧槲ブナ崖椒其餘諸木に
も産し 湧の陳搭門ヶ五種遺規の一訓俗遺規補編の
中に耕讀堂雜録の家蚕の下に至テ於ニ山蚕ニ別有ニ
一種ニ山中槲橡青杠柞樹及ヒ荘村ノ之椿樹下野南摩の方
皆可ニ飼養フと以ふハ常の山繭の事なり
言ワリブリツクリといひ其傍村の久野及び武蔵国多

摩郡にてシナンタラウ信濃にてシナノ太郎太和十
津川奥にて崖椒に生する者を山椒太夫といふ 又信濃にては
栗に生するに限りて山椒太夫といふ 又阿波祖谷紀伊熊野及有田郡山保
田等の山中にも産しシロケムシといふ形蚕の如く
にして長く四月頃虫の大さ二寸五六分許色青く頭
足紫黒色尻に同色の剣あり又食ふ木葉によりて其
色種々あり皆長白毛ありて毛蟲の如し而して手に
捕へは人を螫さ此虫を養ふ不栗まても漆にても多
く植をき四方へ溝を掘て形小なるときは諸山にあるを

捕へ来り其樹に放をべし満たれバ虫道を去る最
露天にをべし虫の腹中に絲二條あり四五月の間殺
て絲を出し製造るに虫の食ふ葉によりて絲に軟硬あ
り又雄絲ハ円く雌絲ハ微に扁し（砂も雄ハ円く雌ハ扁なり）又虫
老ぬれハ白根多く若けれハ白根少けれども力弱し宜
く中を撰るべし絲をとるに大小時を争ふ者なり此
虫其まゝ養ひ置けバ後にハ口中より絲を吐き繭を作
る長さ二寸許濶さ五六分両頭尖り褐色にして透明
なる絲縦横に交斜して羅網の如し因幡伯耆にて久

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

カシダワラ大和にてアミブクロ越中にてへチヘ美
濃信濃にて神ノガラノヽ出羽にて山姥ノ袋といふ
此外方言猶多かるべし信濃にて此繭を田中より植
ゑ切て指の先に入れ水田中の草を採に用ふ此繭に
てテグスを製作する者と誤り思ふ人多し其製法及
蚕を養ふ法詳なる事ハ故ありて茲に贅せん後日に
録すへし

四足雛

[illegible]

天保二年辛卯の夏五月二十七日本州有田郡箕島村
の栗山長二郎家に四足の雛鷇を生む其日死せり同
月九九日門人同郡の山田正元より塩藏して吾藩醫
學館産物會に出しヽ唐山にも此事ありて明の王圻カ續
文獻通考 巻二百二十 四物異考五 云元順帝至正十八年戊戌春正
月銭塘盧子明カ家ノ一雞伏ニ九雛ヲ一雛有ニ四足ニ二足ハ在ニ翼下ニ
不ニ數日ニ皆死ス而各家亦無ニ他異ニ

清の董含の蓴郷贅筆巻下に云 華亭尹署ニ雞音ス一雞ノ四足後ニ二足聯テ接ニ尾間ニ不能行立有ニ周生館ニ於テ其家ニ親見之

初編補遺三條 紫荷花草 暴ス雛 有足蛇
第一巻に載る紫雲英ハまた紫荷花草といふ高士奇
カ清吟堂集巻七に紫荷花草を載せて注に江南菜花黄十九後

有叢荷花草遍地開叢花農人取雜河泥澱田馬食之易
肥といへり
第二巻に圖を出せるカムリトリは清の王大海か海島
逸誌巻四山海拾遺に暴ら雞形如鴿大與家鴨等身高五六寸
而冠上羽毛高至徑尺色青藍柔膩如孔雀之屏見人則
展其屏以相迎云蓄之可辟邪卻火災絶白蟻和蘭及
甲必丹園必羅致畜養焉といへるに能的當れ
第三巻蛇足の下に有足蛇の事を載る古も出しお
けり百錬鈔巻に云　鳥羽天皇保安三年五月十

四日故二品親王白川堂寺善勝　前庭有足蛇出來爲犬被
喰殺

金頂砒

天保六乙未の夏予外科正宗藥品考二巻を著して刊
行せし下巻の金頂砒を師説に従ひて本經逢原一巻に砒
石色白有黄暈者名金脚砒とあると同物とせり其後
清の王洪緒か外科症治全生後集巻三諸藥法製に砒石經製
無毒不傷人畜同鉛入器内砒放鉛底火熔煙盡爲度鉛
上刮下者名金頂砒といへるを見れは金脚砒と別物

なり

雪酒

同書同巻に好雪酒を出す雪酒は閩小紀巻上に雪酒收
雪水醸之夏月飲之可銷暑といへる者とし升菴の後
呂祖全書巻十七の中に收むる治病仙方一百籤を閲る
に第十一籤に◎蘇葉一両雪酒一鍾即白酒用水煎服却
病有功と記せり白酒とあるも一説なり白酒は別に録す

小鹿

天明年中伊勢白子村彦兵衛の船神昌丸異国へ漂流
の時舟人光太夫携来る處の小鹿一隻乾腊と成る者
蔵めて今我官庫にあり大さ僅二寸餘ありて總身
鹿紋備り両角ともに三岐なり全く常の鹿と異なら
ずこれ西洋中の奇産にして人工の者にあらず按を
るに清の宋牧仲の筠廊偶筆巻上に康熙丁未冬余代観
如都謁相國栢郷魏公公飲以荷蘭酒暑中又於坐間見小
鹿一隻長二寸許雙角嶄然與大鹿無異といふ是なる
べし　清の王漁洋の精華録巻四に云西洋小白牛白質
斑文長二尺高一尺七寸項有肉峯　此外鳥獣の
類に小者あること居易録池
北偶談等に散見しえるべし

豹

和名鈔巻十八に日本紀私記を引て奈賀豆可美の訓あれとも和産なし又唐山にも稀なりといふ朝鮮には多く産せりといへり其皮舶来あり毛葉細にして厚く褥となして上品なり其質黄赤其斑黒く小く中空くして環の形をなせり故に金銭豹本草また銭文豹八閩通志といふ又白豹陸璣詩疏。白質黒文者 赤豹同上。赤質黒文者 黒豹爾雅翼 青豹別國洞冥記今本不載 土豹本草衍義。無文者 艾葉豹本綱。文如艾葉者 金線豹同上。文如金線者 水豹同上。和名阿坐良之等の類一ならず總て豹の類は其

性虎より猛なりといふ天保元庚寅の年朝鮮より活豹一隻を来る即金銭豹なり其年の四月より京摂の間にて観場に供し轉致して六月伊勢に到る形状圖の如く大さ舶来の虎皮を以て較ぶるに小なり嘯くとき口中赤くして朱を塗りし如し一日に雞三隻をもて食ふといふ又魚肉を與ふるに小魚は食せず棘鬣魚比目魚類の大なるを食ふ七月に至りて病に罹り斃るといふ故ある事なり也同國矢川にて皮を剝き肉を食ふ其肉味軽しといふ本 邦にて豹の生肉を食ふ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2
ガラス使用

こは古今未曾有の奇事なり

淡州黒木

仲野安雄が重修淡路常盤艸（巻八後附）に云福井村の河岸なる土中に黒木といふ木あり平めになして横に生じたる根もなく葉もなし堀出して水邊に置ば幾年も枯る事なし日に當りて八日なれば什々に砕け散なり木の色黒くして削りて見るに鐵力木なる木理ありてうるはし大なるは六七尺もありて異しき物なり河岸に自らあらはれ出るを里人拾ひ採て薪となすに臭氣ありとぞ此物他所にある事を聞ず直探すれば石炭なる事はさもあるべくしてかくらるなるらん

臙脂木

今三絃舗に紅木といふ木あり最舶来にして和産なし其質紫檀に似て堅く紅紫色なり刀鋸を以てこれを断に其粉手を染て紅色をなす三絃の棹に作りて紫檀に勝れり俗に紫檀の古渡上品の者とするは誤りなり按ずるに桂海虞衡志（草木志）に臙脂木堅緻色如臙脂可鏇作出融州及州洞桂林屬縣亦有之といひ廣東新語（巻二十五木語）海南文木の條に有臙脂木高三四丈葉類波羅色如臙脂紅艶與秋風木紫荊性皆耐土不易朽と

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』 請求記号 W391-N2

ガラス使用

いふ者是なるべし又月輪摂政兼實公の玉海第十冊に
承安二年七月九日丙子國司頼政朝臣注進、子細、去頃當國嚴島鬼形者五六人許出来、乗珍重之船一艘来着件島下畧注に船以紫檀赤木等之類造之といへる赤木も紅木の事なるらん

僕奈

延喜典薬式巻三十七に僕奈といふ薬品を近江七斤越前四斤越後二斤十三両因幡一斤等より貢する事を載せ刻本の式而訓なし源齊恒君の考異巻六に京本の式越前越後の條及貞享本の式越后の條等に久留陪支久左の訓ある事といへり又本草和名第十巻外薬の部に本草稽疑と引て僕奈に作り和名久留倍岐奈（伊呂波字類抄六）とあり因州の侍醫安惟親茶菴の因幡志巻二末に典薬式の僕奈を引き樸樕山奈ノ二種ヲ脱字シテ一種ニ句シタルニヤといひしハ大なる誤りなり按るに今越後にクルメキナといふ草あり訪問するに花戸にて延年草一名當薬子千振一名當薬も別なり一名北方奇特圓畧して奇特圓ともいふ一名エレサウと呼ふ草なり諸國深山幽谷に産しに殊に東北國

小多し又延齢草（大和）養老草（伊勢）エレグヽサ（阿波）エグサ（同上）タ
チアフヒ（江戸）ミツバイチゴ（越中）ミツバアフヒ（同上）エレン
サウ（河内）等の名あり春苗を生し形状王孫に似て大に
葉は圓尖にして茎端に三葉並び對して傘の形をな
も大抵高さ尺餘北國の者は一茎高さ三四尺葉の大
さ三葉にて徑り尺七八寸にも至る夏月三葉の中心
より短茎出て三瓣の花あり大さ一寸許常品は紫黒
色なり日光山中には淡紫色白色等あり冨士山には
緑色あり皆花後圓実を結ぶ中に細子あり根は莪朮

の如く白色にして味苦し故に寒邨窮郷用ひて積を
壓し蟲を殺す僕奈ト即此クルメキなるべしクル
メキはクルベキの轉なり和名鈔四巻十蟲豸具類に辨
色立成を引て反轉を久流閉岐と訓せり和訓栞前編巻八
にくるべきは糸をくりてへる具なれば名づく今も
東國にはさういへり所によりてかせともまひをも
いふ也枕草紙にくるへきわといへりとあり此
草三葉一蓋反轉の形をなしたるをもてクルベキナと名
傳へし古名今に越後に残りしなるべし

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』　請求記号 W391-N2
ガラス使用

普通本山あひに作る非なり

山藍（やまゐ）

萬葉集 巻九 長歌の中に紅赤裳（クレナヰノアカモ）数十引（スソヒキ）山藍用（ヤマアヰモテ）摺衣服（スレルキヌキテ）而

云々

延喜式 巻十四 縫殿寮の中に云 新嘗祭小斎諸司

青摺布衫 中略 山藍五十四圍半 延喜儀式 巻三 践祚大嘗

會儀の中に云 青摺袍各一領 注ニ具表以山藍摺之裏淺

緑

拾遺集 巻四 冬部 に云

山ゐなる雪のふりかゝりて侍るを見て　伊勢

「足引の山ゐにすれる白ゆきハすれる衣のこゝちこそすれ

又 巻九 雑部下

祭の使ニたち出侍人ニ もとよりまうて

うちかけ侍けるを 利侍を 御覧しと

おもひ侍けれハ　東宮女蔵人左近

「わきりなくとく雲ハあまりて足曳の山井乃水ハ桜ちらまる」

と詠める山井ニ山藍をこめけるなり 又雅亮装束

抄 巻二 舞人装束の事の條ニ云 わりきぬの長きハ

山藍といふそめしにて竹桐に鳳凰をすりあり 群書類従中の

和訓栞 前編巻三十四に云 やまゐハ山藍と書り

本ニハ載れ

自然ニ山ニ生ズル一種ノ蘞ナリ大嘗會ノ齋服ニ用
ユルサセラルヽヲ以テ是ナリ蘞ニ似テ葉ニ縮文アリ今
賀茂ニ多シ又紀州ニモ出セリ本草原始ノ透骨草
也トイヘリ 按ズルニ山蘞ハ本州各郡山谷陰地及
森林中ニ多ク産ス方莖高サ一尺餘葉ハ金粟蘭葉ニ
似テ薄ク柔ニ淺緑色鋸歯及皺紋アリ雨々相對シ生
ス此生葉ヲ採テ緑汁ヲ出シ物ヲ染ル深キ青色ヲナス冬月捄
ル細莖ヲ抽キ淺緑ノ小花ヲ開ク三瓣ニシテ蘂モ
多緑ナリ花落チテ小青実ヲ結ブ大サ山椒ノ如ク熟シ
テ猶青シ生根藍色ニシテ乾ケバ藍色トナル物理小識巻九
ニ載スルハ本綱巻二十一雑草類ノ者ト同物ニシテ
和産ナシ又救荒本草巻五ノ透骨草ハ蓋毋草ナリ又
汝南圃史巻十ノ鳳仙花ヲ透骨草トイヘリ皆同称異實ナリ
小山蘞梁ニ易ル上ニ青ノ葉似ニ蕑蘭ニ三月抽テ條種ヲトイフ者是
ナリ古説ノ透骨草ノ充ルハ誤リナリ 透骨草同名多
シ本草原始ノ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6, 附録』　請求記号 W391-N2
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『桃洞遺筆. 巻4～6,附録』　請求記号 W391-N2

ガラス使用